第６０回　全国小学校社会科教育研究協議会研究大会　北海道大会
第７７回　北海道社会科教育研究大会札幌大会
第４９回　札幌地区社会科教育研究大会

大会成果号

2019・2020・2021・2022　４か年継続研究

社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成
～見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び～

北海道社会科教育連盟
札幌市社会科教育連盟

北海道社会科教育連盟綱領

社会の正義と平和を維持するためには、人権の尊重が個人および集団のうちに熟成されていなければならない。これの表明と実現と積極的な教育実践と研究を展開し、自主と連帯によって、社会科教育の前進を図ろうとするすべての同士の共通の姿勢としてこの綱領をうたいあう。

〇われわれは人間の尊さを自覚し、日本の社会に人権の意識と感覚とを正しくうちたてていく勇気と知性をもとう。

〇われわれは現実を正しく認識し、みんなのしあわせのうえに自分のしあわせを築いていく人間を育てることに、希望と創意をもって挺身しよう。

〇われわれは北海道に生きる現実の姿を凝視し、社会認識を深め、その進捗改善に資する力を育てて、あい路や障害を切り開いていこう。

〇われわれは同士の理解と協力いよって、教育実践を積みあげ、他との連携によって、研究の場をつくり深まりと拡がりを求めあっていこう。

〇われわれは時代の拘束や潮流に対しても、人間尊重の精神をもやしつづけ、正義を愛し平和と自由をうちたてる同士として行動しよう。

目　　次

○　目次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

○　大会実施要領　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

○　挨　　拶

・全国小学校社会科研究協議会会長　和　田　幹　夫　・・・・・７

・北海道社会科教育連盟委員長　白　崎　正　・・・・・８

・北海道社会科教育連盟研究部長　斉　藤　健　一　・・・・・９

・札幌市社会科教育連盟小学校研究部長　竹　村　正　・・・・１０

○　指導講評

・文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官　小　倉　勝　登　先生　・１１

・大妻女子大学家政学部児童学科教授　澤　井　陽　介　先生　・１３

○　記念シンポジウム　記録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

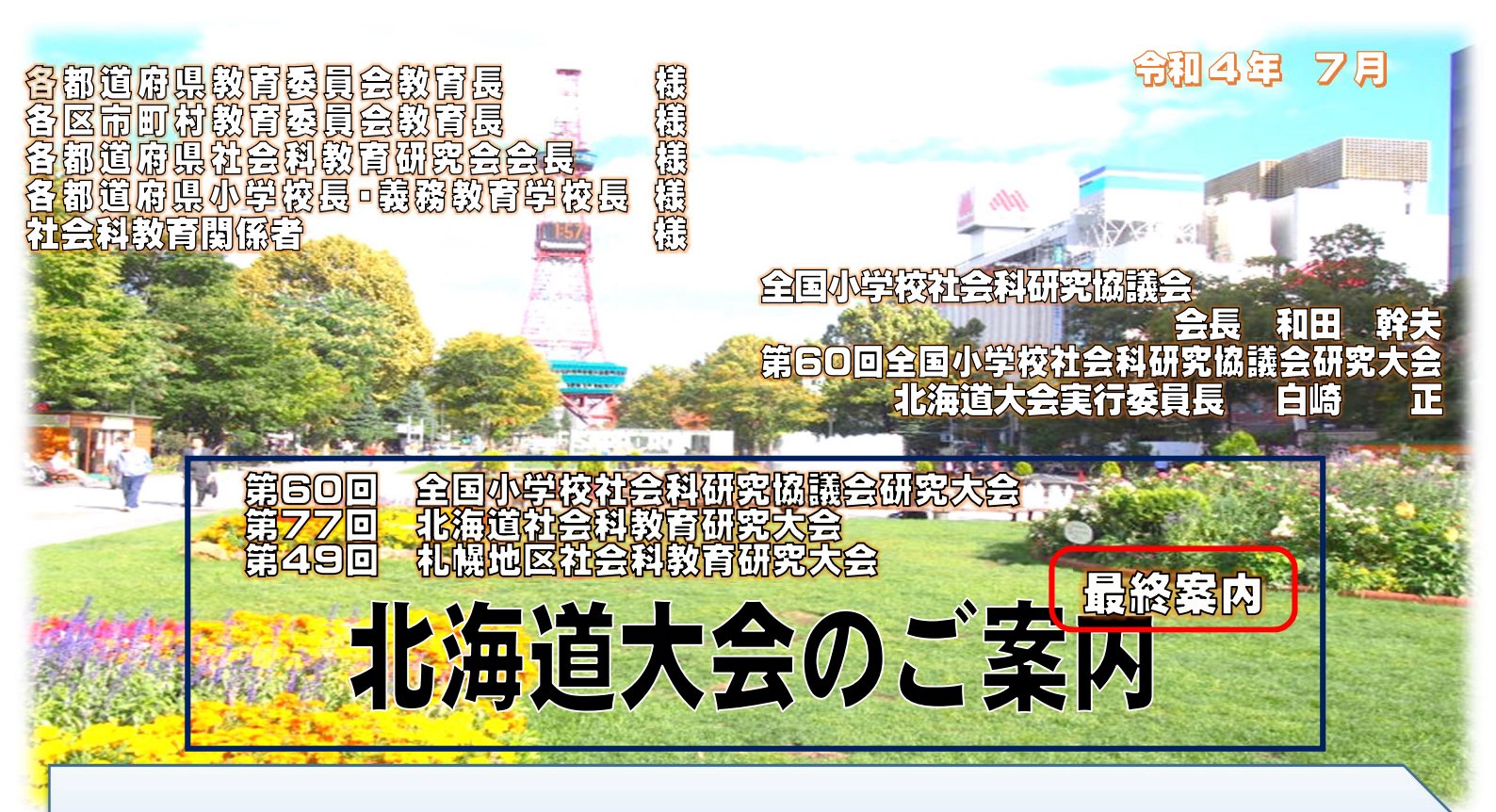
○　各部会の授業記録、分科会記録

・３年Ａ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
・３年Ｂ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
・４年Ａ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
・４年Ｂ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
・５年Ａ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
・５年Ｂ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
・６年Ａ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
・６年Ｂ部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７
・特設提案授業部会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１

○　大会組織図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４

○　あとがき

・札幌市社会科教育連盟事務局長　山　本　秀　夫　・・・・・５５



各都道府県教育委員会教育長　様
各区市町村教育委員会教育長　様
各都道府県社会科教育研究会会長　様
各都道府県小学校長・義務教育学校長　様
社会科教育関係者　様

令和４年　７月

全国小学校社会科研究協議会
会長　和田　幹夫
第60回全国小学校社会科研究協議会研究大会
北海道大会実行委員長　白崎　正

第60回　全国小学校社会科研究協議会研究大会
第77回　北海道社会科教育研究大会
第49回　札幌地区社会科教育研究大会

最終案内

北海道大会のご案内

【　大　会　主　題　】

「社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成」

～見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び～

１　大会日時・会場・内容

＜期　　日＞　令和4年10月27日（木）１０：００～１６：４５
＜会　　場＞　カナモトホール（札幌市民ホール）　札幌市中央区北１条西１丁目
さっぽろテレビ塔　札幌市中央区大通西１丁目
＜参加形態＞　会場参加とオンライン参加のいずれかを選択
＜内　　容＞　全体会・特設提案授業・記念シンポジウム・学年別授業研究会・閉会行事
※全体会・記念シンポジウム・閉会行事はライブで配信します。
※学年別授業研究会は、上記２会場に分散して行います。
※各学年の公開授業・特設授業・指導講師講評は、事前に録画配信します。
録画配信は、クリアな音声・高品質な映像でご覧いただけます。

２　指導講師

文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官　小倉　勝登　先生
大妻女子大学家政学部児童学科　教授　澤井　陽介　先生

３　主催

全国小学校社会科研究協議会　北海道社会科教育連盟　札幌市社会科教育連盟

４　後援

文部科学省　北海道教育委員会　札幌市教育委員会　全国連合小学校長会
北海道小学校長会　北海道中学校長会　札幌市小学校長会　札幌市中学校長会

５　大会日程

【前半会場：　カナモトホール　大ホール】

9:30	10:00	10:30	10:45	11:40	13:00	14:15
受付	全体会	休憩	特設提案授業放映	昼食休憩	記念ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	

＜全体会＞
※全体会は、カナモトホール大ホールで行います。
※オンライン参加者にはライブ配信を行います（全小社研会長挨拶等）。

＜特設提案授業放映＞
※事前に録画した授業をダイジェストにして放映いたします。

＜昼食＞
※昼食は各自でお取りください。会場周辺には各種飲食店、コンビニがあります。

＜記念シンポジウム＞
※記念シンポジウムでは、シンポジストを中心に、*北海道社会科教育連盟が発信する研究内容やその主張を際立たせた特設提案授業について討論します。*

〔シンポジスト〕

大妻女子大学家政学部児童学科　教授	澤井　陽介　先生
新宿区立四谷小学校校長（全小社研元調査研究部長）	石井　正広　先生
札幌市立伏見小学校主幹教諭（北海道社会科教育連盟研究部長）	斉藤　健一
札幌市立山鼻南小学校教諭（札幌市社会科教育連盟研究部長）	竹村　　正

【後半会場：カナモトホール各会議室・大ホール、さっぽろテレビ塔各会議室】会場分散

14:35	16:10	16:20	16:45
学年別授業研究会	休憩	閉会行事	

＜学年別授業研究会＞
〔カナモトホール分科会〕３年Ａ　４年Ａ　５年Ａ　６年Ａ　特設授業
〔さっぽろテレビ塔分科会〕３年Ｂ　４年Ｂ　５年Ｂ　６年Ｂ
※各学年別授業研究会場では、会場参加とオンライン参加の両方で研究討議を進めます。
公開授業が研究主題「社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成」につながるものとなっていたかについて、研究内容Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに沿って討議します。
※助言者：各分科会２名　計１８名
（北海道教育委員会指導主事・札幌市教育委員会指導主事・北海道内の小学校長）

＜閉会行事＞
※閉会行事は各分科会場で行います。カナモトホール大ホールからのライブ配信を視聴します。

【カナモトホール（札幌市民ホール）へのアクセス】

＜地下鉄でお越しの場合＞
東西線大通駅・南北線大通駅・東豊線大通駅にて下車、31 番出口正面

＜JR 札幌駅からお越しの場合＞
徒歩：約 15 分
地下鉄に乗り換え：
南北線・東豊線さっぽろ駅より乗車→大通駅にて下車→31 番出口正面

６　研究グランドデザイン

全国小学校社会科研究協議会北海道大会
北海道社会科教育連盟　　グランドデザイン

【研究主題】

社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成

～見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び～

「社会を知る」
地域への愛着・愛情を基に、多様な価値観に触れ本質を見極めることができる子に。今に、未来に、地域に、社会に参画し、力強く生き抜く子に。

「世界を切り拓く」
自分の世界を広げ、認め合う社会、温かい社会、人間らしい社会を構築できる人材を育てていく。排除の文化ではなく、共生の文化を創る子に。

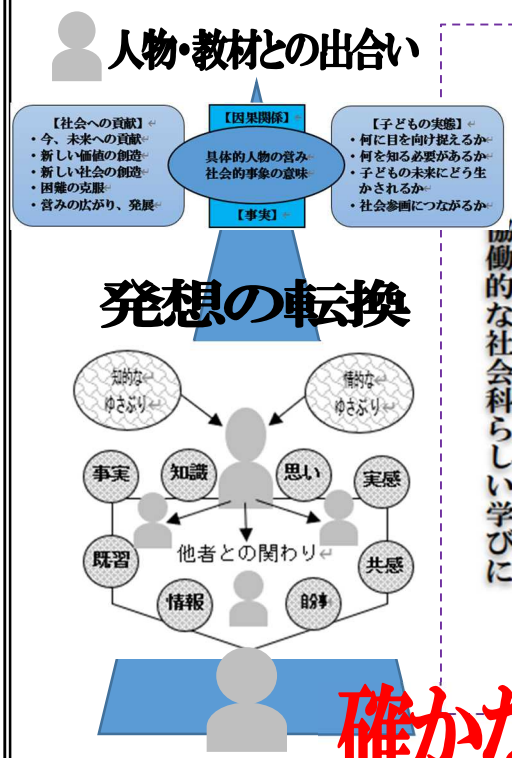
「北国の子」
雪や寒さは大自然が与えた恵みである。「困難さや厳しさを克服する」「発想を転換しマイナスをプラスに変える」。そのような捉え方ができる子に。

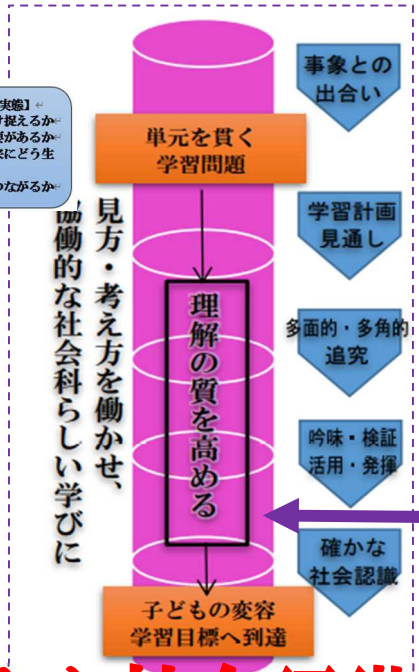
目指す子どもの姿
- ●物事の本質を見極め、学んだことを他の学習や生活に活用できる子
- ●主体的に、協働的に学び、視野を広げ、発想を変え、自分の力で自分の可能性を広げていくことができる力強い子
- ●自分の世界を広げ、未知の世界、未来の世界に向かって自分の力を試し、共生の世界を創っていく子

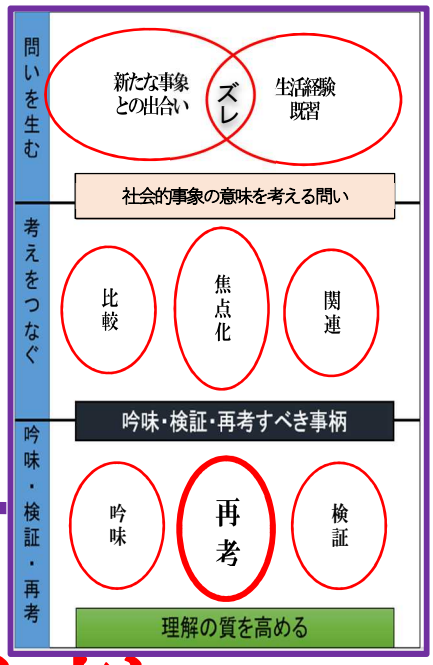
研究内容Ⅰ
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

研究内容Ⅱ
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

研究内容Ⅲ
社会的事象の意味を考える一時間







確かな社会認識を育む

7　学年別授業研究会・特設提案授業

学　年	分科会	単元名	授業者
３年	A	「はたらく人とわたしたちのくらし」 農家の仕事～札幌の玉ねぎ生産を守り続ける農家～	井上　友美 （札幌市立八軒西小学校）
		「はたらく人とわたしたちのくらし」 工場の仕事～消費者ニーズに応え続ける製麺工場～	髙倉　平造 （札幌市立ノホロの丘小学校）
	B	「くらしを守る」 火事からくらしを守る～人々の命を守る消防士～	町村　康武 （札幌市立宮の森小学校）
		「はたらく人とわたしたちのくらし」 農家の仕事～札幌黄の通年出荷の秘密～	樋渡　剛志 （北海道教育大学附属札幌小学校）
４年	A	「北海道の特色ある地いきと人々のくらし」 ～国際交流に取り組むまち・ニセコ町～	山本　貴大 （札幌市立八軒西小学校）
		「北海道の特色ある地いきと人々のくらし」 ～お菓子作りがさかんなまち・帯広市～	坂本 亜姫奈 （札幌市立伏見小学校）
	B	「自然災害からくらしを守る」 大雪からくらしを守る～持続可能な冬のまちづくり～	栗原 聡太郎 （札幌市立宮の森小学校）
		「北海道の特色ある地いきと人々のくらし」 ～国際交流に取り組むまち・ニセコ町～	木田　孝紀 （札幌市立桑園小学校）
５年	A	「情報化した社会と産業の発展」 情報を生かす産業～販売と運輸を結び付けた地域創生～	高田　雄平 （札幌市立八軒西小学校）
		「情報化した社会と産業の発展」 情報産業とわたしたちのくらし～令和型情報産業の工夫～	宮崎　世司 （札幌市立資生館小学校）
	B	「情報化した社会と産業の発展」 情報を生かす産業～販売業の発展～	田島　吉晃 （札幌市立宮の森小学校）
		「わたしたちの生活と食料生産」 これからの食料生産とわたしたち～持続可能な食料生産～	土岐　友哉 （札幌市立緑丘小学校）
６年	A	「明治の国づくりを進めた人々」 幌内鉄道～近代化を支えた基盤とは何か～	鵜沼　吉史 （札幌市立八軒西小学校）
		「明治の国づくりを進めた人々」 ビール工場～外面・内面の両面から近代化を捉える～	中田　充 （札幌市立山鼻小学校）
	B	「明治の国づくりを進めた人々」 札幌農学校～歴史の中心に「人の営み」があることを実感する～	勝谷　亮太 （札幌市立宮の森小学校）
		「明治の国づくりを進めた人々」 ビール工場～外面・内面の両面から近代化を捉える～	石本　歩 （札幌市立緑丘小学校）
特設４年	A	「わたしたちのくらしと電気」 ～24 時間いつでも使える電気を支える人々～	河原　秀樹 （北海道教育大学附属札幌小学校）

※分科会は、A がカナモトホール会場、B がさっぽろテレビ塔会場です。
※特設授業は、事前録画配信に加え、大会当日にダイジェスト版を放映する予定です。
※各学年別授業研究会の会場に入場できる人数は、20 名程度（特設授業分科会場以外）となっております。入場の上限に達した分科会場は、申込入力ができなくなりますので、他の分科会場への申込をお願いいたします。なお、特設授業分科会場は、200 名程度入場することができます。

８　学年別課題研究会

３年	提案者	単元名
北海道 旭川地区	早川栄里子 （旭川市立 千代田小学校）	工場の仕事
北海道 網走地区	田中　邦博 （斜里町立 知床ウトロ学校）	わたしたちのまちと市 ～市の様子～
北海道 渡島地区	渡島社会科 教育研究会 小学校研究部	わたしたちの町と市～ 七飯町の「ここがイイね！」を見つけよう～
北海道 函館地区	松浦真木子 （函館市立 赤川小学校）	わたしたちの市の歩み ～函館百年物語～
山梨県	菊島　咲 （山梨大学教育学部 附属小学校）	店で働く人と仕事
京都市	辻本　将佳 （京都市立 唐橋小学校）	安全なくらしを守る ～火事をふせぐ～
岡山県	今﨑　裕樹 （岡山市立 平島小学校）	岡山市の うつりかわり
佐賀県	江島　嵩瑛 （基山町立 若基小学校）	店ではたらく人

４年	提案者	単元名
北海道 旭川地区	松田　隆之 （北海道教育大学 附属旭川小学校）	自然災害から くらしを守る
山形県	中村　拓也 （山形市立 南山形小学校）	くらしをささえる水
	東海林湧起 （東根市立 東根小学校）	自然災害から くらしを守る
兵庫県	古家由佳子 （神戸市立 魚崎小学校）	兵庫県の 伝統文化と先人の はたらき
広島県	高橋　伸明 （東広島市立 平岩小学校）	古い町なみを いかすまち
徳島県	生杉　真美 （鳴門教育大学 附属小学校）	地震にそなえる まちづくり
福岡県	津秦　将弘 （糸島市立 前原小学校）	糸島平野物語

５年	提案者	単元名
北海道 釧路地区	澤田　康介 （北海道教育大学附属 釧路義務教育学校） 石川　美穂 （釧路市立 昭和小学校）	国土の自然と ともに生きる－森林 とともに生きる－
北海道 後志地区	村上　久恵 （ニセコ町立 近藤小学校）	我が国の国土の自然環境と 国民生活の関わり ～自然災害を防ぐ～
北海道 空知地区	鹿糠　昌弘 （美唄市立 美唄中学校）	未来をつくり出す 工業生産
岩手県	小野寺大地 （北上市立 南小学校）	未来をつくり出す 工業生産
千葉県	塩見　直之 （千葉市立 西の谷小学校）	わたしたちの 生活と森林
東京都	北村　仁一 （大田区立 道塚小学校） 長谷川実佐 （世田谷区立 深沢小学校）	情報を生かす産業
石川県	吉野　智晴 （野々市市立 御園小学校）	水産業のさかんな地域
名古屋市	河瀬　祐介 （名古屋市立 小幡小学校）	自動車をつくる工業
大阪府	屋良　一輝 （大阪市立 野田小学校）	情報を生かす産業
奈良県	木之下昇平 （奈良市 教育委員会）	自動車をつくる工業

６年	提案者	単元名
北海道 上川地区	池田　雄二 （富良野市立 東小学校） 佐藤　正志 （士別市立 士別南小学校）	武士の政治が 始まる
北海道 十勝帯広 地区	滝口　太郎 （帯広市立 広陽小学校）	明治の国づくりを 進めた人々
北海道 函館地区	菅原　拓 （北海道教育大学 附属函館小学校）	明治の新しい 国づくり
宮城県	野村　文弥 （仙台市立 袋原小学校）	世界に歩み出した 日本
群馬県	萩原　靖久 （高崎市立 新町第一小学校）	戦国の世から 天下統一へ
神奈川県	武藤由希子 （横浜市立 本牧小学校）	新しい時代の幕開け ～横浜から見える 日本の近代化～
岐阜県	林　賢太郎 （岐阜大学教育学部 附属小中学校）	国の政治って どんなもの？
山口県	千々松哲大 （山口大学教育学部 附属光小学校）	わたしたちの暮らし を支える政治
香川県	半澤　友博 （観音寺市立 柞田小学校）	明治の国づくりを すすめた人々～「今の日本」「未来の日本」国づくりを進めたそれぞれの道」
沖縄県	久場　公貴 （中城村立 中城小学校）	琉球の按司の世の中

御挨拶と御礼　～北海道大会開催にあたって～

全国小学校社会科研究協議会
会長　　和田　幹夫

晩秋の澄み渡った青空に美しい紅葉の映える中、令和４年１０月２７日、札幌市内会場への参集並びにオンラインにより、全国から大勢の皆様のご参会を賜り、第６０回全国小学校社会科研究協議会研究大会北海道大会が盛大に開催されましたこと、心よりお礼申し上げます。今年度も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けながらの開催となりましたが、早い時期での開催期間及び方法変更の決断、事前の授業動画の配信、オンラインと対面の併用によるハイブリッド方式など、この二年間における大会開催のノウハウの結集により、充実した大会となりました。内容的にも、午前は、全体会で大会基調提案と特別授業提案（「わたしたちのくらしと電気～２４時間いつでも使える電気を支える人々」）、午後は、大妻女子大学教授　澤井陽介先生、新宿区立四谷小学校長　石井正広先生、北海道大会の研究を推進されたお二人の先生による記念シンポジウム、そして、学年別授業研究会、最後に文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　小倉勝登先生による全体講評と、一日開催ながらも非常に密度の濃い大会となりました。先の見通せない厳しい状況の中、大会を成功裏に導かれた大会実行委員長の白崎校長先生を中心とする関係の皆様に、心より感謝を申し上げたいと思います。

さて、地球規模の感染症や環境問題、相次ぐ紛争や戦争、人権問題など、様々な課題が山積する予測困難なこの時代において、よりよい社会を創造する担い手としての資質・能力の基礎を育む社会科教育の役割は、より一層高まってきています。それに対し、北海道大会では、子ども自身が「社会の様子や仕組みを知り、自分の世界を広げ、未知の世界や未来の世界に思いを馳せながら自分の世界を切り拓いていく」姿をめざし、「社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化」「理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成」「社会的事象の意味を考える一時間」の三つの視点から研究を深めていました。そして、実践においては「新たな価値の創出や共生」など、よりよい未来を創ろうと努力する人物の営みについて知識的な側面と情的な側面から教材研究を深め、子ども自らが見方・考え方を働かせながら主体的に追究し、その学びを基に社会的事象の意味について自ら問いをもち考える学習を通して、主題の実現に迫っています。

提案された授業は、どれも北海道ならではの教材（人物の営み）を開発し、繰り返し検討や実践を積み重ねられたことがうかがえる充実した内容でした。子どもたちが自分のこととして学習問題を追究するとともに、それまでに獲得した知識や、培った見方・考え方を働かせながら、「～のはずなのに、なぜ…？」と社会的事象の意味や働きに迫る問いを自ら見いだし、学びを深めていく姿がたくさん見られました。その姿を通して、教材及び教材研究の有効性や単元展開の工夫、見方・考え方を働かせた単元を貫く学習問題の設定や追究のあり方、そして、社会的事象の意味を考える問いの醸成や学習活動の工夫など、多くのことを学ばせていただきました。

また、記念シンポジウムにおいても、教師の指導性と児童の主体性、社会的事象の見方・考え方を働かせ自ら問いを見いだすことのできる教材と出合いの工夫、これからの社会を考えるための見方・考え方など、多くの学びや示唆を得ることができました。

結びになりますが、本大会の開催にあたりましてご苦労・ご尽力をいただきました、北海道社会科教育連盟委員長及び大会実行委員長の白崎正校長先生をはじめ、大会の役員、実行委員、会場の教職員の方々、関係の皆様に改めて感謝と敬意を申し上げます。また、温かいご指導・ご支援を賜りました文部科学省、全国連合小学校長会、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道小学校長会、北海道中学校長会、講師・助言の先生方、研究推進並び大会運営にご協力いただきました札幌市小学校長会、札幌市中学校長会、全国の皆様に重ねて感謝申し上げます。本大会の成果が、全国における社会科教育のさらなる充実・発展に資することを祈念申し上げ、あいさつとさせていただきます。

御礼～いただいた金言の重みと価値を次に繋ぐ～

北海道社会科教育連盟　委員長　白崎　　正
（札幌市立八軒西小学校長）

穏やかな秋晴れの下、大通公園に面するカナモトホール（札幌市民ホール）と札幌テレビ塔において、第六十回全国小学校社会科研究協議会研究大会北海道大会を盛会裏に終了することができました。和田幹夫会長はじめ、ご指導、ご助言、ご協力いただいた多くの皆様に深く御礼申し上げます。

大会当日、北海道は、新型コロナウイルス感染者数が全国一。結果として、５月の段階で開催方法を会場参加とオンライン参加のハイブリッド方式に移行したことが正解と出ました。

【配信授業と学年別授業研究会】

大会実行委員会は、「オンデマンド配信授業の充実」と「ストレスのない安全・安心な大会」を合言葉に、総務、広報、情報、会場、研究、会計の各部門に分かれ、企画、準備に当たりました。

研究大会の命である 17 本の授業配信には、徹底的にこだわりました。９月上旬から撮影、録画、編集を開始し、準備が整った授業から配信しました。教室には、カメラ３台、集音マイクを２本、ミキシング機材が入りました。画面を通しても、あたかも目の前で授業が展開されているかのような、子どもの動き、表情、目線、つぶやき、息遣い、教師との間合い、それらをつぶさに感じ取っていただくことができる授業動画となりました。

大会前に、全ての授業を配信したことで、参会者の皆様には、当日参加する学年部会以外の授業も見ていただくことができました。学年別授業研究会では、全国の先生方から貴重なご意見をたくさんいただくことができました。北海道各地区代表の校長先生、指導主事の先生からご指導ご助言を賜り、研究の深化、改善へのご示唆をいただきました。心より感謝申し上げます。

【指導講師の方々からのお言葉】

大会の指導講師、小倉勝登先生（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）、澤井陽介先生（大妻女子大学教授）、シンポジストの石井正広校長先生（新宿区立四谷小学校）から、次のお言葉をいただくことができました。

小倉勝登先生は、「北海道は、人のはたらきが見えるということに焦点化させている。子どもたちが社会科を好きになる授業をどう展開していくか、そのヒントが今回の授業提案に隠されていた。北海道の先生方を見ていると、授業づくりを楽しんでいる。今回の大会で学んだことを地域の先生方に伝えてほしい」と、ご講演の中でお話しくださいました。

澤井陽介先生は、「北海道の先生からは、先輩から受け継がれてきた意志の強さを感じる。『なぜ～』を生み出すために北海道の先生は工夫し、子どもから湧き上がってくる問いで授業をつくっている。社会科の面白さは教材化にある」と、お話しくださいました。

石井正広校長先生は、「北海道の教材の構造は、理解の質を高めるだけでなく、未来を切り拓く時に役立つ視点がある。分かるが『判る』という価値認識につながるのが、北海道の考える『問い』である」と、北海道の授業のよさについてお話しくださいました。

過分なるお褒めの言葉に、北海道社会科教育連盟会員一同、素直にうれしく思うと同時に、今日の北海道の社会科を創り上げてきた諸先輩の足跡に、改めて尊敬の念と誇りを持ちました。私共、北海道社会科教育連盟は、これからも、研究者ではなく実践者として「授業実践から考える」社会科学習の深化、充実、発展のために、真摯に子どもと向き合って参ります。全国小学校社会科研究協議会会員の皆様、これからもたくさん学び合いましょう。どうぞよろしくお願い致します。

第 60 回　全国小学校社会科研究協議会研究大会
第 77 回　北海道社会科教育研究大会
第 49 回　札幌地区社会科教育研究大会

子どもの姿で主張できた北海道大会

北海道社会科教育連盟　研究部長　斉藤　健一
（札幌市立伏見小学校）

４年前から始まった本研究。困難な時代だからこそ、「自分の世界をもち、その世界を切り拓いていける子どもを社会科の学びを通して育てていこう。」そのためには、「発想を転換し、今を、未来を、切り拓いている具体的人物の営みを通して『社会を知る』ようにしよう。」

そう考えて、研究主題を **社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成** と設定しました。

全国大会では、各学年４本と特設授業の計 17 本の実践を通して子どもの姿で主張しました。

どの実践でも、以下のような子どもの姿を見ることができました。

・前のめりになって社会的事象の意味を明らかにしようとする子どもの姿
・具体的人物の営みの本質を見いだそうと必死に追究する子どもの姿
・クラスの仲間と教師と共に社会科の学びを楽しむ子どもの姿

こうした姿が見られた要因は、教材化する際に「社会認識のための教材化の視点」と「社会参画のための教材化の視点」の二つの視点をもとに教材の本質を見極めたこと、理解の質が高まるように単元を構成したこと、公開場面において「〇〇のはずなのに、なぜ…なのだろう？」という子どもの追究に火がつく問いを設定したことにあります。

「絵本なのに、なぜラジオで読み聞かせ？絵が見られないのに…」
「札幌黄は作りにくいのに、わずかしか作らないのなら、作らなくてもいいのに…」
「まだ開拓されていないのに、もっと先につくるべきものがあるのに、なぜ農学校を？」

など、どの実践からも「〇〇なのに…」という子どもの声がたくさん聞こえてきました。子どもの中に矛盾が生まれ、その意味や意図を明らかにしようと本気になって追究している姿。問いを見いだし、問題解決に向かって協働している姿こそ、社会科の学びを楽しむ子どもの姿でした。

私たち北海道社会科教育連盟が一年一年積み上げてきた 70 年間の研究の成果を、子どもの姿を通して、全国に大きな主張、メッセージ性のある提案として発信することができました。授業者の皆さん、授業づくりに貢献してくださった皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

今、全道各地区で、目の前にいる子どもたちに良質な社会科の授業をすることで、10 年後、20 年後の未来社会に参画する子どもたちの姿勢が変わってくると信じ、本研究を進めてきました。澤井先生のご講評の中で「子どもたちの授業への参加姿勢が社会への参加姿勢にも感じられ、日本の未来は明るいと感じました。」と言っていただいたことは、大きな喜びです。子どもたち同様に、この４年間、研究推進、組織運営に携わった私たち会員は、それぞれの立場、役割において、貴重な経験を積むことができました。持続可能な社会の構築のため、社会科教育のよりよい発展のために、私たちが果たすべき責務はまだまだあります。この４年間で得た大きな財産を次年度以降にしっかりつなげていきたいと思います。

最後になりますが、４か年研究において全道大会を開催し、秀逸な実践をしてくださった後志地区、上川地区、札幌地区、各大会において責任提案や紙面提案で実践を報告してくださった各地区、それぞれの大会に参加してくださった皆様、本当にありがとうございました。皆様のおかげで全国大会に自信をもって臨み、大きな成果を上げることができました。お礼申し上げます。

北海道の研究を全国に発信

札幌市社会科教育連盟　研究部長　竹村　正
（札幌市立山鼻南小学校）

北海道社会科教育連盟の研究を全国に問う。第 60 回全国小学校社会科研究協議会研究大会北海道大会において、全 17 実践を通して社連の研究を全国に発信した。４か年継続研究の最終年である今年度は、「研究の精度を上げる」を合言葉に、各実践の主張点を研ぎ澄ますと共に、我々社連の強みである『発想の転換』『問い』『社会的事象の意味を考える一時間』について見直し、全国に主張する大変重要な一年となった。

研究内容Ⅰ
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

全国大会では、社会的事象を創出する 14 名の具体的人物の営みを教材化した。人物の営みを中心に据えた教材化の価値について、全国に向けて強く主張することができた。単元構想図に整理しながら『教材の本質』を見極め、事実を基に知的に迫ったり、人物の思いに情的に寄り添ったりして、これらの人物の営みの価値を明らかにした。そして、子どもの具体的な姿で、その価値を全国に発信できた。

また、教材化の視点として「社会認識のための教材化」なのか、「社会参画のための教材化」なのかを考えながら実践を構築した。同じ教材を扱っても、教師の教材化の視点の違いにより、子どもの追究の視点が変わる。教材化の視点については、今後も研究を重ねていきたい部分の一つである。

研究内容Ⅱ
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

「単元を貫く学習問題」と、教材の価値に迫るための「サブテーマ」。これらは、子ども自身が立ち返るものとなり、追究の見通しをもって学習計画を立てる上でも、重要であることが分かった。実際の体験を取り入れたり、オンラインでのインタビューや見学を行ったりしながら、単元全体をデザインして単元を構成するように工夫した。そうすることで、子どもが主体的に学び、確かな社会認識を育み、さらには社会参画意識の高まりへとつながる実践となった。

研究内容Ⅲ
社会的事象の意味を考える一時間

全 17 実践、単元を通して蓄えてきた力を活用・発揮する「社会的事象の意味を考える一時間」を公開した。この一時間は、人物の営みの価値を追究する時間である。『〇〇なのになぜ？』という「問い」を生み出し、「協働的な深い学び」を通して子どもたちの考えをつなぎ、子ども自らが学びを「吟味・検証・再考」する。このような三つの場での追究により、理解の質を高め、確かな社会認識を育むことができるのだと全国に提案することができた。

社連の今後を見据えて

研究内容Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通して、北海道社会科教育連盟が積み上げてきた研究を全国に発信することができた。社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成を目指した本研究。『共生』の時代を創り、社会参画意識をもった子どもを育むため、今後も部員一人一人の力を結集して、研究を更に「しんか（進化・深化・新化）」させていく。

第６０回全国小学校社会科研究協議会研究大会
北海道大会　指導講評記録
『全小社北海道大会から学んだ共有したい大切なこと』

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　　小倉　勝登氏

≪閉会式全体講評より≫

今回の大会は大変学びの多い一日だった。この大会では特に、三つの研究の柱が絡み合って、本時と呼ばれる社会的事象を考える一時間にフォーカスして示されていた。

共有したい三つのこと

〇教材化の重要性

・子どもたちが社会的事象に対して、「自分事」として関心をもち、関わり方を考えていけるような教材の開発・吟味が大切である。
・北海道は、人の働きが見えるということに焦点化させている。人を登場させて、人のはたらきを共感的に捉え、考えること。この登場する人が社会参画のモデルとなっている。
・大事なことは、教材を開発したら、吟味（解釈）をすること。どのように吟味するかは、今回の提案を参考にしながら各地域で考えてほしい。
・学習指導要領の内容と擦り合わせることも大切。学習指導要領の内容のどこに該当するのか整理する。

〇学習過程の工夫の重要性

・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善は、端的に言えば問題解決的な学習過程の充実。
・単元で考える授業を作る事が大切。単元構成をしっかりとして、その上で本時がある。45 分の授業が学習過程に位置付くことが大事。

〇問いの重要性

・一人一人の子どもに、資質・能力を育成するためには、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善が必要。このときの鍵となるのが、見方・考え方を働かせるということ。
・見方・考え方を働かせるうえで欠かせないのが「問い」。45 分の授業だけではなく、学習問題の設定も含めて、単元の中で描いていくことが必要。

〇他の都道府県の実践より

・社会的事象に出合わせて「なぜ？」を生み出す→予想をして学習問題を作っていく→見通しを立てる。「問い」を出すためにどのような過程を踏むのか、そのプロセスが重要なポイント。

〇学習指導要領実施状況調査　指導質問用紙調査より

・子どもたちの社会科に対する意識は、「役立つと思っているけど、あまり好きでない」という実態がある。これは、子どもたちから我々教師に突き付けられた宿題である。
・子どもたちが社会科を好きになる授業をどう展開していくか、そのヒントが今回の授業提案に隠されていた。
・今回の大会で学んだことを明日からの授業に反映させてほしい。さらに、学んだことを地域の先生方に伝えてほしい。
・北海道の先生方の授業を見ていると、授業づくりを楽しんでいる。先生方には、社会科の授業づくりを楽しんで子どもたちと楽しい授業を作ってほしい。

≪全体講評動画より≫

〇「主体的・対話的で深い学び」の視点から、これまでの授業実践を振り返る

・初等教育資料 10 月号において、初等授業実践を主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善することについて整理されている。
（１）「主体的・対話的で深い学び」の向かう先は資質・能力の育成であること
（２）単元や題材など内容や時間のまとまりの中で授業改善を考えること
（３）「指導と評価の一体化」を踏まえること

この３点を踏まえ
・「主体的な学び」の視点→子どもたちの主体的な学びを引き出すような学習過程の工夫が重要。
・「対話的な学び」の視点→自己の考えを広げ深める点に着目して、学びの質を高めること。
・「深い学び」の視点→習得・活用・探究の過程を見通して、当該教科等ならではの見方・考え方を働かせながら、資質・能力のバランスのとれた育成に向かう学習過程を単元や題材レベルで構想し、指導計画の改善を図ることが重要。

○主体的・対話的で、深い学びの視点からの授業改善をデザイン

・授業改善の方向性としては、小学校学習指導要領の総則第３章第３節　教育課程の実施と学習評価において、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが示されている。
・小学校学習指導要領社会編においても、学習の問題を追究・解決する活動の充実を図ることが示されている。
・目標の改善においても、目標の柱書に社会的な見方・考え方を働かせ課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指すことが示されている。
・「課題を追究したり解決したりする活動」については、解説で、主体的で対話的で深い学びを実現するよう児童が社会的事象から学習問題を見いだし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程などを工夫することが考えられたりすると説明されている。
・端的にいえば、小学校の社会科学習においては、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善は、問題解決的な学習過程の充実ということができる。

○全小社の研究に期待すること

・①学習指導要領の内容を踏まえた上で、プラスアルファのある提案。特に、そのときに教材の分析・吟味に力を入れていただきたい。
・②問題解決的な学習過程について。子どもの学びのプロセスを大切にした学習過程、45 分の授業が学習過程に位置付くことが重要。
・③問題解決的な学習過程の充実。「問い」「話し合い活動」「ＩＣＴ端末の効果的な活動」など

○社会的事象の意味を考える一時間について

・社会的事象の意味を考える一時間の問いは、北海道社会科教育連盟が最も大切にしてきたもの。これは、「○○のはずなのに、なぜ、・・・なのだろう？」という問いを醸成すること。
・ズレを基に問いを生み、考えをつなぎ、吟味・検証・再考という問いを基に、子どもに自分の考えを説明したり、議論したりして社会的事象の意味を考える一時間を、単元の中に意図的に設定する。

○社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化について

・人の営みが教材となり学習を進める場合、子どもたちが出会う人物が大きな意味をもつ。本研究では、そこに発想の転換という教材感のもと、「これからの未来を見据え、新たな価値を創出する人物」「多様な価値観を受け入れ、強い意志と豊かな発想をもって共生を目指す人物」という吟味をかけている。
・「社会認識のための教材化」の視点と「社会参画のための教材化」の視点からの分析は、教材の本質を見極めることだけでなく、単元構成につながっていくことが特徴的。

○理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

・本研究では、見方・考え方を働かせ、協働的な社会科らしい学びを展開するために、「単元の目標を具体的にする」「単元を貫く学習問題を考える」「見方・考え方を働かせ解決を図るような意図的な単元構成を考える」「社会的事象の意味を考える一時間を設定する」の組み立てで授業づくりをしている。
・子どもたちが見方・考え方を働かせ、問題解決できるように教師が問いを軸にして、単元を通した授業デザインを意図的・計画的に行うということ。

○最後に

・本大会における会場校での授業実践提案では、全国から持ち寄る研究実践が各都道府県地域の社会科研究や各学校の授業実践の一助となり、学習指導要領に基づいた、社会科学習がいっそう充実することを大いに期待したい。

第６０回全国小学校社会科研究協議会研究大会
北海道大会　指導講評記録
『北海道大会の社会科研究（授業実践）から学ぶ』

大妻女子大学家政学部児童学科教授　　澤井　陽介氏

<研究内容Ⅰについて>

・北海道の社会科の特徴は人物を取り上げ、その人物の考えに寄り添いながら、発想の転換に気付いていく。
・板書がそのまま教材構造になっていて、板書を見ていると社会が見えるような板書になっている。

（北海道の板書の特徴）
・立場Ａと立場Ｂの思いや願いがつながっている
・立場Ａと立場Ｂが連携、協力、相互理解していくことで一つの方向性が見えてくる
・働き（機能）Ａと働き（機能）Ｂが相互に関わり合うと目的や意味がより見えてくる
・目的Ａと目的Ｂがつながることで真の意義、大きな概念が見えてくる

・結び付きやつながりなど「相互関係」から見ることで「発想の転換」を生み出している。つまり、Ａから見るだけでなく、Ｂからも見ると新たな発想が生まれてくるということではないか。
・社会科は人々のつながりであるから、複数の立場から見ていくのが多角的で、それによって見えてくるものが多面的な要素（歴史的な面、経済的な面、地理的な側面など）である。
・北海道の先生方がめざす社会科は、物事は人と人のつながりに成り立っていることに光を当てて、そうすると、色々な角度から発想が変わり転換できるようなポイントが見えてくるということではないか。
・人間を中心的に取り上げると、道徳的になりがちである。それを避けるためには、客観的側面（数値等のデータ）、共感的側面（思い・願い、考え）、具体的・実感的側面（実際（仕事、活動）の様子）が均等バランスである必要はないものの、それぞれ入っていることが望ましい。北海道の先生方の授業はその３つがよく入っていることを感じた。
・学習指導要領にある見方・考え方の中の、「事象や人々の相互関係」「地域の人の意図や国民の生活と関連付けたりすること」をかなり意識した授業であった。見方・考え方を子どもに養っていく授業を意識していた。

<研究内容Ⅱについて>

・単元目標に迫るポイントが後半にあって、そこで特色や意味に迫る必要がある。そこで調べてきたアンサーが結び付いて概念に迫る。公開された授業が単元の後半にあるのは、とても納得できた。
・主体的・対話的で深い学びは、単元を通していくものであるから、調べてきたアンサーが結び付いて概念に迫っていくのは「深い学び」の手立てと称してもよいのではないか。
・むしろ、北海道の社会科の授業の特徴は「深い学び」の手立てがある本時展開が面白い。

（北海道の授業づくりの特徴）
・本時の中で、「Q1:出合いの『え？！』から、なぜ『え？！』って言ったの？」と、子どもの疑問をしっかりと掘り下げていく。問いの醸成を丁寧に行っている
・その後、１時間の授業の中で解決すべき学習問題が設定される。Q2:「なぜ～なのか？」「どうして～だろう？」が多い
・それを追究していく中で関係性やつながりを板書で理解していく
・その後、Q3 のダウトが途中でかかる「じゃあ～でいいのでは？」「本当に～なのかな？」
・そして、Q4 の目標を実現する問い「つまりどういうこと？」「何のため？」「何が大切なの？」
・Q4 がとても大事で、この４つが仕掛けられているのが面白い。そして、最後にまとめが行われる

・単元展開の中で、子どもたちが選んで自力で進むという場面設定をしていくことが大事である。
・自ら学習を調整しようとする態度を育む授業づくりの構造として、子どもたちが選んで自力で進むときに関連付け、見通しが大事である。すなわち、子どもの意識的側面（これを調べたら分かりそうだ、私はこういう資料を選びたい、私の疑問はここに強くあるから、これを知りたい）を大事にしながら授業を進めていく。難しいが、このような場面設定をすると、これからの社会科の課題に答えられるのではないか。

（４５分の授業を充実させる１０の具体策）

①本時の目標をよく吟味する	⑥板書を構造化する
②本時の課題を丁寧に届ける	⑦問い返しを重視する
③予想を重視して学習の見通しをもたせる	⑧一問（複数）答を心がける
④学習形態に変化を付ける	⑨学習のまとめに向かう手立て（問い、資料、話合い活動など）を工夫する
⑤話し合いのルールを展開する	⑩子どもの言葉でまとめたものを価値付ける

・⑧について、北海道の先生方は決して対話をさせていないのではなく、先生が子どもの発言を受け止めつつ、他の子どもに振ったり、他の子どもとつながせたりしながら、教師がタクトを振っているようなイメージがある。
・あえて言うなら④について、学習形態をわざと変えなくてもよいが、発言ルールを少しグループ形式にしてみるといったバリエーションがあってよいかもしれない。

<これからの研究について>

・社会参画のための視点、すなわち議論する視点があるとよい。
・中学年は難しいかもしれないが、議論する時の視点（実効性（効果）、実現可能性、持続可能性、主体）が教材から生み出され、教材化の視点を追究の視点として子どもたちに考えさせていくような授業が考えられていくとよい。
・そのためにはＩＣＴを活用するのが便利（一覧にして自分の考えを相対化してみんなの考えと比べたり、つなげたりしていく）だが、使いながら話し合い言葉（文脈）にしていくのが大事であって、考えを出して終わりではない。
・学習のまとめを丁寧に行い、子どもたちの多様な表現を生かすようにしていくとよい。

<大会の授業について>

・間違いなく言えることは、北海道という郷土に誇りを感じたり愛着をもったりする子どもたちの姿が授業で見られた。
・子どもたちの授業への参加姿勢が社会への参加姿勢にも感じられ、大げさかもしれないが日本の未来は明るいなと感じた。たくさんの人の力が結集した内容豊かな研究大会だった。

記念シンポジウム記録

シンポジウムテーマ

『見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学びとは』

司　会　者	北海道社会科教育連盟	事務局次長	佐野　浩志
シンポジスト	大妻女子大学家政学部児童学科	教　　授	澤井　陽介 氏
	新宿区立四谷小学校	校　　長	石井　正広 氏
	北海道社会科教育連盟	研究部長	斉藤　健一
	札幌市社会科教育連盟	研究部長	竹村　　正

（以下、発言者の敬称は省略）

◇発想の転換を生かした教材化とは

佐野：北海道が大切にしている「発想の転換」について、両研究部長から具体的にイメージの共有を。

斉藤：暖かい地域の方は雪や寒さは厄介だと感じるだろう。しかしながら、北海道民は、雪や寒さは、大いなる自然の恵みによる資源であり、私たちの生活文化に豊かさを与えるものと、プラスイメージで捉えている。例えば、雪の冷気を冷房に使ったり、保冷庫に使ったりするような取組では、雪を自然の恵みと捉え、生活に生かしている。雪や寒さは、そのままでは、マイナスのものかもしれないが、人々の知恵により、いくらでもプラスに変換することができる。この「発想の転換」は、社会科の学びにおいては、雪や寒さに限定されることではない。「教材のもつよさそのもの」や、「社会的事象を創出している人物の営みの価値」、「その地域に根差した生活を豊かにしている人々の営み」の中にこそ見られるものである。今回の授業での１４人の人物も発想を転換し、豊かで持続可能な社会を構築している。人物の営みの本質をしっかり見つめて授業にしている。

竹村：私たちの教材化の根本は人である。この人たちが手間や苦労、大変さをどのように受け止め、前に進もうとしているかに教材化の面白さを感じる。例えば手間がある中でもたくさんの種類の麺を作る製麺会社の営み、中学生に地域の雪かきに参加を促す札幌市の取組、農家の負担が大きいにもかかわらずスマート農業を推進する取組、開拓間もない北海道にビール工場をつくる意味、「まちの厄介者」となっていた牛の糞尿をまちの電力やエネルギーとして活用する町長の営み…など、マイナスをプラスに置き換える発想の転換を学ぶことで、夢やあこがれをもち、自分達が働くときに生きると考えている。

佐野：マイナスをプラスに変えている教材を見つけるのは大変なこと。全国どこでも使えるような一般化のポイントは。

斉藤：マイナスからプラスであればよいわけではない。人物の営みの本質は何かを見極めるようにしている。様々な視点で人物や教材を見て、教材の価値を日々見出すように鍛えている。

◇本大会の授業から見る教材化と本時の問い

佐野：全 17 本の授業から、石井先生や澤井先生がどう感じられたか率直な感想を。

石井：今の小学生が私たちの老後、未来を支えていく人になる。河原学級の子どもの感想を見て、バイオガスプラントの価値や喜井町長が目指す未来や持続可能性に気付く子が多いのが素晴らしい。そういう子を育てるためには、３つの大切なことがある。１つ目は「互いに考えを伝え合う子どもの発言力」である。コロナ禍だったが、問いの力、高めあう学級風土、見方・考え方を子どもが働かせること、継続的な授業スタイルが根付いていることが素晴らしい。２つ目は構造化された板書。追求の視点や思考の流れを視覚化し、授業では子どもの発言を聞いて一緒に作っている。

３つ目は子どもが本気になる魅力的な教材である。人物の営みや働き、マイナスをプラスに変える事例など、学習指導要領を踏まえて教材解釈して授業をしている。

澤井：河原実践は、実物や実際の大きさを出して力の入った授業だった。北海道の先生からは先輩から受け継がれてきた意志の強さを感じる。教材が主張する授業では、教師の主導性が出過ぎると言われるが、教師の主導性と子どもの主体性はどちらも大事である。単元全体を通してどのような力を付けるかを考えることが大事である。
見方・考え方は、教師の教材化の視点と子どもの追究の視点をつなぐものである。教師の視点と子どもの視点が結びつくと、今回のようにつながってくる。見方・考え方は教え込むものではなく、子どもが使っていくことで鍛えられるものである。
教材研究には入り口と出口の２つの側面がある。そして、北海道の先生は地域の実態を意識している。人物を取り上げると共感的側面だけになってしまいがちだが、データや具体的事実など様々なバランスを考えるのが大切。また、「なぜ～、」を生み出すために北海道の先生は工夫し、子どもから湧き上がってくる問いで授業をつくっている。社会科の面白さは「教材化」にある。

◇北海道の授業のよさとこれからの北海道の研究に期待することは

佐野：北海道の授業のよさをどのように評価されたか。

石井：北海道の教材の構造は理解の質を高めるだけでなく、未来を切り拓くときに役立つ視点がある。「わかる」には、分かる（事実認識）、解かる（関係認識）、判かる（価値認識）がある。この価値認識につながるのが北海道の考える「問い」である。また、目標の実現に迫る本時が単元の後半に位置づいていることが、ここ数年の全小社研大会でも共通している。子どもの主体的な学びを大事にすることがこれから求められる。例えば、山登りでも、先生が先頭をいくのではなく、子どもが苦難にぶつかりながら解決していく。山の頂上の登り方は子どもが考え、登らせてあげる責任は教師が取る。東京でも、北海道のよさを引き継ぎながら次年度の大会に活かしたい。

佐野：社会的事象の意味を問う「～なのになぜ」は単元計画に無理に入れ込むことにつながらないかという Google Forms からの意見もあるがどうか。

竹村：北海道の研究では子どもの意識の流れに沿った単元の設計を大事にしている。積み上げた既習が現れるのが社会的事象の意味を考える１時間であり、単元構想図をもとに、構造的な教材化を図り、深い学びを意識した。

佐野：見方・考え方を生かした教材化で大事にしたことは何か。

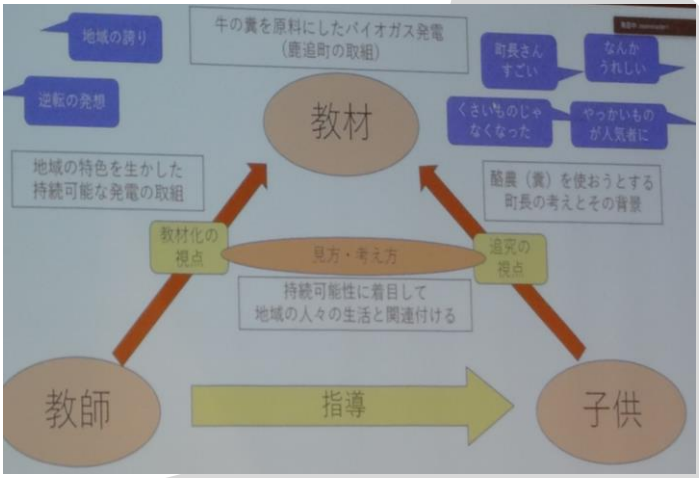
斉藤：社会認識のための教材化の視点なのか、社会参画のための教材化の視点なのかを意識して教材化をしてきた。子どもたちの授業への参加姿勢が社会への参画姿勢につながると澤井先生に言っていただけて、目の前にいる子どもを明日もしっかり育てていきたいと感じている。

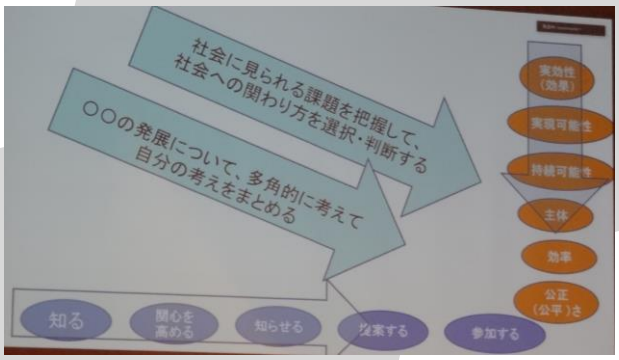
佐野：この会のまとめ、これからの北海道の研究に期待することを伺いたい。

澤井：北海道の先生は問いの中で「特色の理解」を意識している。初めに見方・考え方を考えるのではなく、教材を子どもにどのように、どんな順番で届けるかを考えると良い。学習問題を作ることが目的ではなく、学習の見通しをもつことが目的である。疑問→予想→学習問題でもよいと、学習問題づくりを柔軟に考えても良いのではないか。問いが子どもに届くかを考えることは、主体的に学ぶことにつながってくる。社会科は単元が進むにつれて焦点化されてくる教科であるため、自分の予想と学習問題を関連付けておくという設計が必要。単元の最初に調べ始めるところと、最後の意思決定をするところは子どもたちに決めさせる授業を目指したい。振り返って終わりではなく、「振り返って前を向く」学習にしていってほしい。
また、今回の研究で、社会参画のための教材化の視点と言っているように、現状認識の見方・考え方だけではなく、未来志向の議論をする力をつけていきたい。無責任な言いっぱなしではなく、持続可能性を考えていくことを今後の研究課題にしてほしい。

大会スナップ

記念シンポジウム





各学年部会、特設提案授業部会
授業記録及び分科会記録

2019・2020・2021・2022　４か年継続研究

社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成
～見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び～

第３学年Ａ部会　授業記録（９／１１時間）

単元名　「はたらく人とわたしたちのくらし　農家の仕事～札幌の玉ねぎ生産を守り続ける農家～」
授業者　井上　友美（札幌市立八軒西小学校）

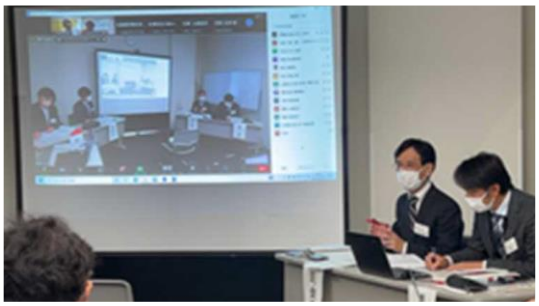
分	教師の関わり	子どもの活動・反応
０	**○前時までの学習の確認をする。** ・澤田さんはどんな玉ねぎを育てていたの？	・「札幌黄と F1 種。」
２	**○50 年前からの澤田さんの畑の品種による生産割合の変遷を提示し予想させ、確認する。** ・F1 種はどんな玉ねぎかな？ ・札幌黄はどんな玉ねぎかな？ ・なぜ札幌黄は残っているの？	・「札幌黄頑張れ。」 ・「F1 種は、病気に強いし、腐りにくいから作りやすい。」 ・「えー、札幌黄１個。」 ・「１０年前から変わっていない。」 ・「札幌黄は作りづらいし、腐りやすいから生産量が少なくなってしまう。」
１０	**○本時の問いを提示する。**	・「札幌黄は伝説で幻だから、作らないわけにはいかない。」
	澤田さんはどうして札幌黄も作り続けているのだろう。	
１２	**○既習内容を基に、消費者と生産者の立場から澤田さんが札幌黄を作り続ける理由を考えさせる。** **○立場を確認し、考えを発表させる。**	○自分の考えをノートに書く。 ・「消費者。」
２２	・食べたい人のことなんというの？ **問い返しをしながら、消費者の立場からの発表をさせ、全体で考えていく。** ・食べた時の様子を聞く。	・「食べたい人がいるからないと困る。」 ・「札幌黄は、採れる時期が少ない。」 ・「期間限定。」 ・「札幌黄がなくなると、札幌黄の料理ができなくなる。」 ・「カレーにして食べたら、甘くて美味しかった。」
２６	**○生産者の立場からの考えを全体交流する。** ・澤田さんの思いを聞いてもいい？	・「美味しいって言われたらうれしくて、玉ねぎ作りも頑張れる。」 ・「札幌黄は病気になりやすくても、みんなが美味しい玉ねぎを食べられるように作っている。」
２９	**○消費者と生産者それぞれの思いを問い返しながら子どもの言葉を基にまとめる。** ・消費者は美味しいから食べたいんだね。 ・澤田さんは、そんな消費者のために届けたいんだね。	・「作っていてうれしいことがたくさんあるから札幌黄を作っている。」 ・「喜んでもらえてうれしいから作っている。」 ・「昔から作っているから。」
３２	**○これまでの子どもたちの言葉を基に、本時のまとめを板書する。**	
	昔から作っている玉ねぎを作り続けて消費者によろこんでもらいたい。	
３９	**○生産のバランスや伝承の意味への考えを深められるように札幌黄と F1 種について揺さぶりをかける。** ・そんなよい玉ねぎならもっと札幌黄を作れば? ・澤田さんにとってどっちの玉ねぎが大事なの？ **○澤田さんの畑のこれから先の生産量のバランスを予想する。**	・「作るのが大変だから、たくさんは作れない。」 ・「札幌黄も甘くて美味しいけど、Ｆ１種もいい。」 ・「札幌黄も F1 種もどっちも美味しい。」 ・「どっちも大事にしないといけない。」 ・「(味が) 悪いわけじゃないなら（作るのが）簡単な方がいいよね。」 ・「札幌黄をたくさん作りたいけど、腐りやすいから・・・」 ・「増やしたいけど、ちょうどいい量を作り続けられるようにするんじゃないかな。」 ・「Ｆ１種と札幌黄のバランスが大事。」
４５	**授業全体の振り返りを行う。**	・「未来（２０５５年）まで作り続けてほしい。」

第３学年Ａ部会　授業記録（８／１１時間）

単元名　「工場の仕事～消費者ニーズに応え続ける製麺工場～」
授業者　髙倉　平造（札幌市立ノホロの丘小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**○写真の人物と２食麺の特徴を確認する。** ・２食麺は２つ入っている麺だったよね。 **○前時までとは異なる種類の麺を提示する。** ・同じに見えるよね。 ・違いがあっても少ししか無いのかな。 ・見て分かるのかな？	・違うところはないのでは？ ・色が違うのかな？ ・少しは違いがありそうだね。 ・近くで見ると分かるかもしれないな。
2	**○２食麺（緑）と熟成縮れ太麺（赤）を比較する。**	○グループで交流しながら比較を行う。 ・匂いはどうかな。 ・赤の方が柔らかいよ。
5	**○比較した結果を問いかける。** ・すごく違うのかい？ **○パッケージを提示する。** ・なんて書いてあるかな？ **○様々な種類の麺を提示する。**	・触り心地が違ったよ。 ・ちょっとした違いだよ。 ・赤は、北海道の小麦を使っているよ。
１０	・どうして「えーっ」って言ったの？ ・全部西山製麺で作っているんだよ。 **○本時の問いを提示する。**	・麺の種類が多くて見分けるのが大変だよ。 ・そんなにあるなんて知らなかった。
	西山製麺は、どうしてたくさんの種類の麺を作っているのかな？	
１５	**○パッケージの写真を配付し、自分の考えを書かせる。**	○自分の考えをノートに書く。
２２	**○考えを発表させる。** **○問い返しをしながら、学級としてのおおよその考えをまとめる。** ・「消費者」と「生産者」のどちらの立場で考えているかを明確にしながら発表させる。 ・刃を作るのは大変だから一種類だけでよいのでは？	・種類が一種類しかなかったらお客さんが飽きるから。 ・太い麺、細い麺があったときに好きな麺を選べる。 ・食べ比べができるよ。味や食感の好みが見つかるね。 ・本格的なお店の味をお家でも楽しむことができるよ。 ・麺によって何人前かが違うよ。 ・大変でも、お客さんに喜んでほしいと思うよ。
３６	**○食べてみたい麺を問い、好みが学級内でも分かれることを確認する。** **○子どもたちの発言を基に、学級のまとめを板書する。**	・クラスの中でも好みが分かれているね。
	西山製麺では、色々な人の好みに合わせてたくさんの種類の麺を作っている。	
	○様々な麺が一年間にどれくらい作られているのかを提示する。 ・あまり作っていないなら作らなくてもよいのでは？ ・一人でも多くの人の好みに合わせているね。 **○西山製麺の方の言葉を提示する。**	・２食麺と比べてかなり作っている量が少ないよ。 ・好きな人がいるから必要だよ。 ・もっと美味しく、喜んでもらえるっていうところが同じ考えだよ。
４５	**○振り返りを発表させる。**	

第３学年Ａ部会　授業分科会記録と実践の振り返り



司会者　末原　恵蔵（札幌市立緑丘小学校　校長）
授業者　髙倉　平造（札幌市立ノホロの丘小学校　教諭）
　　井上　友美（札幌市立八軒西小学校　教諭）
助言者　長瀬　雅一（函館市立あさひ小学校　校長）
　　可児　隆洋（網走市立中央小学校　校長）
記録者　坂口　明加理（札幌市立緑丘小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

両実践ともに、人物の営みについて二つの立場から考えていたが、井上実践では、消費者と生産者の立場分けではなく生産者の思いを中心に追究させることで札幌黄作りの葛藤にも迫ることができたのではないか。髙倉実践では、現代の流通は複雑になっているからこそ、販売者という視点も入れることで、西山製麺の多角経営戦略について追究することもできる。人物の営みの本質に迫るための考えの位置付け方を吟味する必要がある。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

３年生部会では、体験的な活動を単元の軸に学習を進めた。それが両実践ともに子どもたちの学びの大きな財産となって単元の中で積み上がっていた。井上実践では、実際に学校の畑で F1 種と札幌黄を育てたことで札幌黄の保管の難しさを実感したことが追究意欲につながった。髙倉実践では、麺づくり体験と工場の作り方の比較から、単元を通して子どもの中に問いが生まれていた。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

井上実践の吟味・検証・再考の場では、未来の澤田さんの畑の玉ねぎの割合を考えるための判断の根拠が見えにくかったが、曖昧な理解の子が交流を通して分かり直していた点では、意味のある交流だった。髙倉実践では、学習指導要領に示されている売り上げや外国とのつながりをどこまで一時間の授業の中で取り上げるのか、学習指導要領との関わりも検討の必要がある。

助言者より

＜可児　隆洋 校長＞

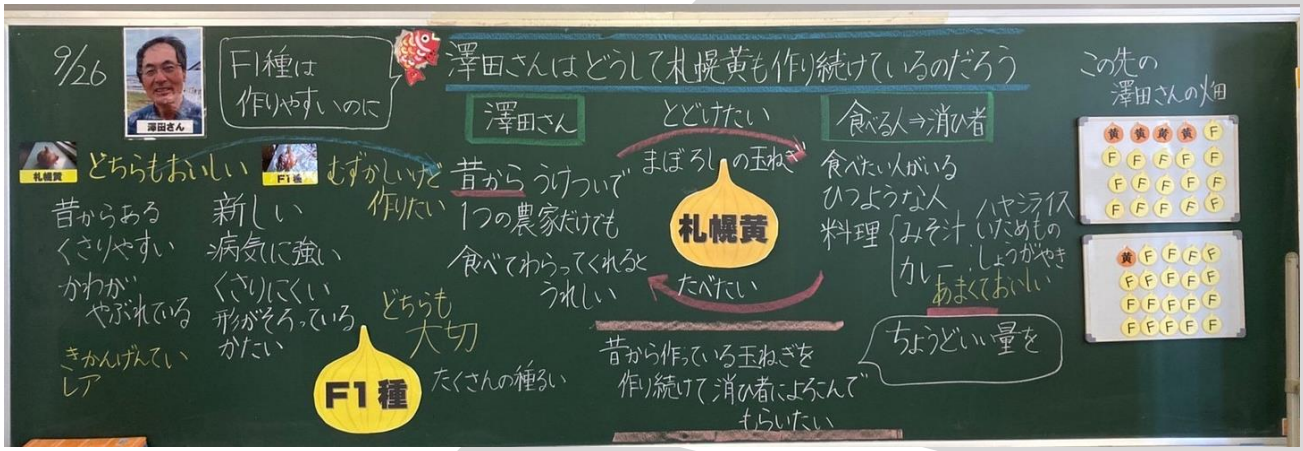
両実践共、学びの積み重ねが見える授業だった。教室掲示にも単元の積み重ねが一時間に表れていた。インターネットで調べて分かることもあるが五感には敵わない。体験することで子どもの主体性を引き出すことができる。また、地域のよさや人物への憧れ、地域への誇りが本実践を支えている。ここから他地域の特色へつなげたり発展させたりしていくとよい。ラーメンであればブランド化や観光資源化、玉ねぎでは希少価値から利益追究を見ていく方法もある。二項対立の構造については社会科専門ではない先生でもやりやすい方法であるので、様々な先生方にこうした授業が広がっていくとよい。

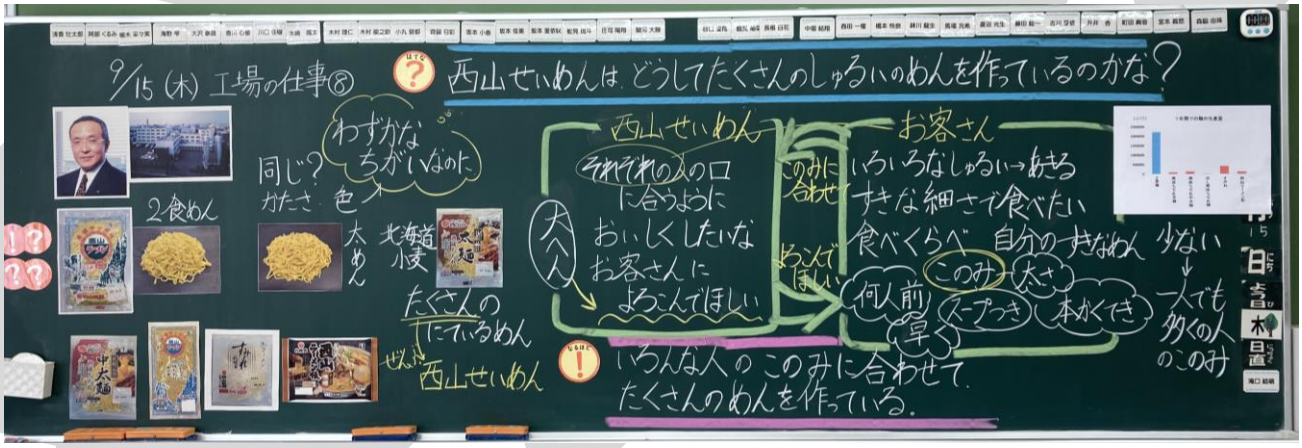
＜長瀬　雅一 校長＞

社会科の魅力を２人の先生が広めてくれた。子どもをぐっと惹き付ける問いになっていた。教科書や副読本を日々活用し、資料活用の能力が育まれているのが伝わった。自分で調べたことを根拠に発表し、子どもたちから「何ページの～」と出てくることが素晴らしい。函館では、「全ての子どもに学びの保証を」と謳い、個別最適な学びのために ICT 活用を推進している。端末があるからこそ、やってみたい、伝えたいという意欲が強くなってきた。自分の考えがもてなかった子も友達の考えを参考に考えられるようになってきた。子ども自身が、単元を通してどう変容したかを自覚することとも関わってくる。配慮が必要な児童も含め、子どもたち一人一人が学びに向かうために ICT を活用していくことが大切である。

3年 A 大会スナップ

授業の様子





第３学年Ｂ部会　授業記録（９／10 時間）

単元名　「火事からくらしを守る～人々の命を守る消防士～」
授業者　町村　康武（札幌市立宮の森小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
４	**○出火の通報があった後の消防士の動きを予想させる。** ・５分以内に到着を目指している平田所長さんたちは家庭科室で出火した場合、到着してどんなことをするのかな？	○消防士の動きを予想する。 ・すぐに放水をする。 ・人命救助。 ・逃げ遅れた人がいないか確認して助ける。
８	**○問いを生むための事実を提示する。** ・平田所長は情報収集をする。	○２度情報収集する意味に焦点化して問いをつくる。 ・到着前とやっていることが変わらない。 ・一度、聞いているはずなのに。
１２	平田所長は、どうして同じ情報をもう一度集めるのだろう？	
	○既習内容を基に問いに対しての考えをノートに記述させる。	○自分の考えをノートに記述する。 ・出火しているところの状況が変わっている。 ・移動している間にけが人が出ているかもしれない。
１９	**○考えを発表させる。**	○考えたことを発表し合う。 ・状況が変わって同じじゃなかったら人の命に関わる。 ・（家庭科室に近い）１年３組や校長室。
２３	・危ないのは誰かな？	・火が広がっているかもしれない。火事が大きくなるとけが人も増える。 ・火の近くにいて逃げられない人がいるかもしれない。 ・逃げられない人がいたら（大変だから）、目で見ながら聞いた方がよい。
３０	・どんなところがよいところなの？	・耳だ。自分の目で見ながら（情報を集める）の方が分かりやすい。
３４	**○板書を確認して、学級としての答えをまとめる。**	○意見をもとに問いに対する答えをまとめる。 ・正しい情報を得る。 ・学校にいる人たちも自分たちの命も守る。
３６	**○吟味・検証・再考を促す。** ・平田所長一人で活躍しているの？	○問いについて吟味・検証・再考する。 ・有田さんや大西さん、久保さん（他の隊員）も。 ・消防団の人たちも。
３７	**○スクールタクトで予想を書かせる。** ・他の３人は何をしているの？	○スクールタクトに予想を書く。 ・みんな情報を集めているのでは？ ・４人いるから、２人ずつ分けて、情報を集める。
４３	**○他の隊員が放水準備をするという事実を伝える。** ・同時にやるとよいことがあるのかな？	○分担して消火にあたる意味を考える。 ・どんどん時間が無くなる。 ・４人で同じことをすると次にやることが遅くなる。 ・手分けすると、二つ違うことを同時にできる。 ・みんなで分けたら、一気に二つのことをできる。
	平田所長がもう一度情報を得ることで安全な消火作業を実現し、消防士たちが協力して放水の準備をすることで、より早く確実な消火を実現している。	
４５	**○授業の振り返りを書かせる。**	○振り返りをノートに書く。

第３学年Ｂ部会　授業記録（８／９時間）

単元名　「農家の仕事～札幌黄の通年出荷の秘密～」
授業者　樋渡　剛志（北海道教育大学附属札幌小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
０	**○札幌市のたまねぎ農家が作る F1 種と札幌黄の割合を提示する。** **○坂東さんが作る札幌黄の割合を提示する。**	○澤田さんが作る札幌黄の割合を円グラフで予想する。 ・F1 種ができてからは下がってきたはずだよ。 ・４分の１って言ってたはずだよ。 ・一度絶滅しかけたって言ってたよ。 ・F１種の方が病気に強くて作りやすいからだ。 ・札幌黄は病気に強くて諦めた人もいると思う。 ・病気に弱くて保存しにくいから、やめた人がたくさん。 ・腐ると出荷できないと儲からないと思う。 ○坂東さんの作る札幌黄の割合を円グラフで予想する。 ・半分くらいだと思う。 ・え！F1 種の方が作りやすいのにどうして？
１０	**○本時の問いを子どもと作り上げる。**	・おいしいっていうことをもっとみんなに伝えたいから。
	どうして坂東さんは札幌黄をたくさん作っているの？	
１２	**○既習内容を基に問いに対しての考えをもたせる。** **○机間指導を行い、子どもたちの考えを引き出す。**	○自分の考えをノートに書く。 ・札幌黄を有名にしたいからだと思う。 ・有名にならないと売れないから。
１８	**○考えを発表させる。** **○問い返しをしながら、子どもの発言を買う人と坂東さんの立場に分けて板書に位置付けていく。**	・また絶滅してしまったら困るからいっぱい作っている。 ・札幌黄をもっと素晴らしいたまねぎにしたいから。 ・作りにくいから、他の農家さんの分も作ってると思う。 ・きれいで美味しそうなたまねぎを選ぶって言ってた。 ・光センサーを使わないと、腐った物を売ってしまって、お店や買う人が困ってしまう。 ・一つの間違いが、すごく大きな影響を与えちゃう。
３５	**○澤田さんと坂東さんが、札幌黄を販売する時期の資料を提示し、吟味・検証・再考を促す。** 	・札幌黄は売られている期間が短い。 ・早く売らないと芽が出たり、腐ったりする。 ・来年の 11 月！？ ・だから巨大な冷蔵庫があったんじゃない？ ・夏の間は冷蔵庫に入れておかないと温度が保てない。 ・他の農家さんは冷蔵庫がないからだ。 ・凍らなくて芽が出ないのが、0℃～１℃って言ってた！ ・腐ってしまったら困るから、すぐに全部売っちゃう。 ○近くの子とたまねぎの販売期間について交流する。
４０	**○自分が札幌黄を作ってる農家なら、どのくらいの期間販売するかを考えさせる。**	・冷蔵庫があったら１年間売る。 ・１週間だけ売ったら、特別だからいっぱい売れそう。 ・冬の期間もあるから、半分ずつ売ったらいいと思う。
	お客さんに喜んでもらい、札幌黄を知らない人にも広めていくために、もっとすばらしい玉ねぎを作ろうと取り組み続けている。	

第３学年Ｂ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者　小菅　雄介（札幌市立藤野小学校　校長）
授業者　町村　康武（札幌市立宮の森小学校　教諭）
　　樋渡　剛志（北海道教育大学附属札幌小学校　教諭）
助言者　大山真由美（北斗市立島川小学校　校長）
　　桑原　啓成（富良野市立扇山小学校　校長）
記録者　佐々木英明（札幌市立米里小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

町村実践については、宮の森出張所の平田所長が情報収集を大切にしていることがよく理解できる授業であった。数値的なデータの提示が見られると更によかった。また、北海道らしい教材として冬でも５分で到着することを主張するのなら、冬の雪を乗り越えるには何が必要なのかが明らかになるとよかった。

樋渡実践では、一年中札幌黄を出荷できるようにする坂東さんの営みについて、３年生の子どもが学ぶための工夫がしっかりとなされていた。また、澤田さんという一般的な札幌黄農家も併せて取り上げたことで、生産方法の特殊と一般を比較し、子どもが自ら選択・判断をしようとする教材化ができた。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

町村実践では、毎時間の問いを子どもから引き出すためのデザインを主張することができた。単元の１時間目に消防士の１日の仕事を予想し、24 時間勤務の中でその多くを占める「出動しない時間」に何をしているかを引き出し、それらから単元で調べる視点を明らかにして「問い」と設定することができた。

樋渡実践では、流通量の多くを占める北もみじと札幌黄を比較することで、子どもが札幌黄の生産や品質管理の難しさに着目して問いを生み、単元を貫く学習問題にすることができた。この単元構成によって、札幌黄を一年中販売するための工夫を探ろうと一生懸命に調べる姿を引き出すことができた。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

町村実践では、情報収集という火災現場では直接消火活動に結び付かない営みをあえて取り上げて本時の問いに設定することで、早さと確実さの両方を求める消防隊員の工夫に迫ることができた。子どもが消火活動を具体的にシミュレーションしながら考える活動は防災教育として学び多い１時間となった。

樋渡実践では、子どもから問いを生み、吟味・検証したくなる手立てを明確にすることができた。自己調整学習という点では、問いを生む場で販売期間を提示し、坂東さんの１年間出荷と澤田さんの一定期間出荷との比較を生み、子どもが両者の価値を選択・判断していく展開にできればよかった。

助言者より

＜桑原　啓成　校長＞

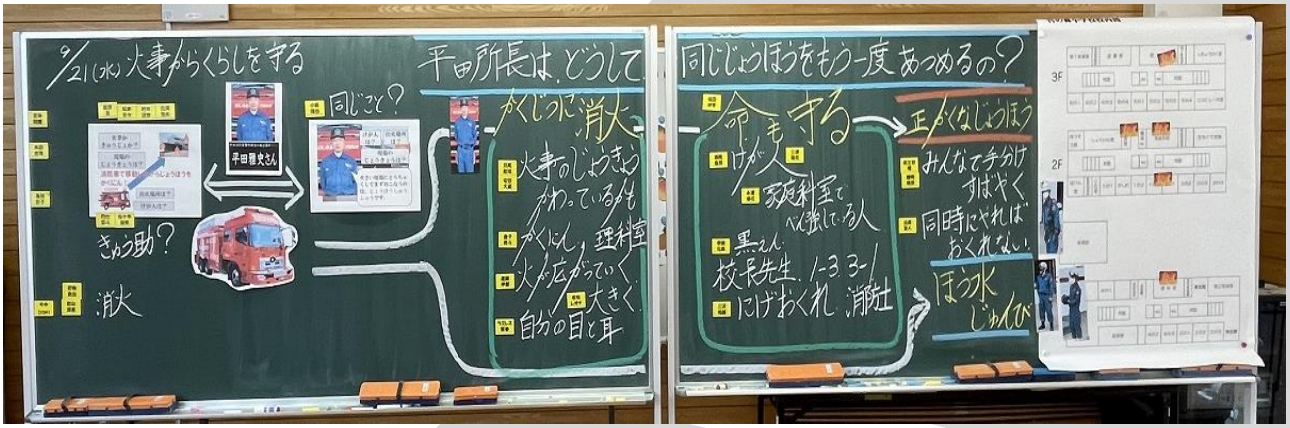
視点の変換がもたらされる関わり、構造的な板書。札幌の研究の継続性と進化が見えた。また、町村学級では社会科の学びが確かにできていた。社会科は、構造化された知識を自覚しなくてはならない。第一段階で事実を捉え、第二段階で、平田所長の確かな情報収集が人命救助につながることを学び、第三段階として、消防署で働く人の営みから自らの行動につなげることができた。

＜大山　真由美　校長＞

３年生らしい学びの授業だった。子どもたちは地域のことを興味深く取り組み、情報を精査する力を付けることができた。思考・判断・表現として、玉ねぎの比較は有効だった。澤田さんと坂東さんの比較によって、子どもたちが考えやすい、判断しやすい本時の展開で、興味深く考えていた。本時の学びを通して、自分たちの生活に生かそうとする姿を引き出すことができた。

3年B大会スナップ

授業の様子



第４学年Ａ部会　授業記録（７／８時間）

単元名　「国際交流に取り組むまち～ニセコ町～」
授業者　山本　貴大（札幌市立八軒西小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**〇ラジオニセコがどのような番組づくりをしているのか確認する。** ・どのような放送をしていたの？	・聴くだけではない、出るラジオ。 ・情報を分かりやすく伝える。 ・町民同士の絆を深める。
5	**〇ラジオ放送局長「宮川さん」が 2021 年に新しい放送を始めたことを提示する。** ・ニセコ町民だったらどのような放送をしてほしいと思っているの？ ・宮川さんだったらどのような放送をしたいと思っているの？ ・実際に放送された「絵本ワールド」を聴く。	・まだ知られていない放送番組。 ・分かりやすくて、みんなが楽しめるもの。 ・絵本ワールドは絵を見て楽しむものだと思っていたけど読み聞かせで楽しいのかな？ ・言葉だけで楽しめるのかな？
１０	**〇本時の問いを生む。**	
	宮川さんはどうして、ラジオニセコで、絵本を読み聞かせる放送を始めたの？	
	〇ラジオで絵本ワールドが開催されることに対し、どのような立場の人が関係しているのか明らかにする。 **〇考えを発表させる。** 	〇自分の考えをノートに書き、伝え合いながら考えを深めていく。 ・ラジオ放送をすると決めた人は、宮川さん以外にも国際交流員が関係していそう。 ・町民の願いも関係していそう。 ・宮川さんや国際交流員の方は絵本ワールドを途切らせたくない。 ・絵本ワールドをもっとたくさんの人に知ってもらいたい。
３０	**〇問い返しをしながら、学級としてのおおよその答えをまとめる。** **〇日本語を国際交流員さん（外国人）、英語を高校生（日本人）が担当している事実を提示し、その意図を考えさせる。** ・それぞれの母国語で話した方が聞き取りやすいのでは？ ・高校生が参加する必要はあるの？	・ラジオでも絵本ワールドが誇りと思えるため。 ・人や文化にも興味をもってもらうため。 ・英語と文化を学べる。 ・高校生が大人になった時にも国際交流が進んでいるから。 ・国際交流を未来につないでほしいと思っているから。
	みんなが平等に暮らしていけるまちづくりを未来にもつないでほしいから。	
４０	**〇振り返りをノートに書かせる。**	・ラジオニセコと絵本ワールドは、ニセコ町の国際交流の場の命だと思った。 ・もっと外国人と楽しく暮らせるように色々な場所で広げたい。

第４学年Ａ部会　授業記録（６／７時間）

単元名　「北海道の特色ある地域と人々のくらし～お菓子作りがさかんなまち・帯広市～」
授業者　坂本　亜姫奈（札幌市立伏見小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**〇六花亭について再確認する。** ・六花亭はどんな会社だった？ ・何で雪なの？	・お菓子を作る会社。 ・お菓子以外にも図書館や美術館もやっていた。 ・北海道を代表する会社を目指していた。
2	**〇六花亭の帯広にあるお店の数と工場の数、札幌にあるお店の数と工場の数を提示する。帯広にしか工場がないことを提示する。** ・札幌は人口が多いからお店も多いね。 ・じゃあ工場の数は・・・？	・人が多いからお店をいっぱい出した方が売れる。 ・人口が２倍くらい札幌の方が多いから、工場も２倍くらい札幌の方が多いはず。 ・えー！？札幌に工場がなかったらお店に届けることができない。
7	**〇本時の問いを生む。**	
	どうして小田社長は、帯広でしかお菓子作りをしないの？	
	〇既習内容を基に問いに対しての考えをもたせる。 **〇ペア交流をさせる。**	〇自分の考えをノートに書く。 ・帯広は、お菓子のもととなる原料がたくさん取れるけど、札幌はあまり取れないし、帯広で作ったものを札幌に渡した方が効率がいい。
１８	**〇考えを発表させる。** 	・小田社長はその地域の物を使うことを目的としている。 ・お菓子は、まちの誇りだから「帯広でできたよ」ってことを大事にしたい。 ・帯広でできた新鮮なものを届けているのと、帯広で作ったものを北海道代表としたい。 ・帯広は農業の技術や研究も盛んだから人が作る原料がおいしいから新鮮でおいしいお菓子が作れる。 ・もし札幌でお菓子を作ったら原料も職人も違うから違う味になってしまう。 ・プロの工夫じゃないと西山製麺でやった安心・安全じゃなくなる。
３３	**〇本時のまとめを行う。** ・まちが元気って？ ペア交流をさせる	・まちが元気になる ・みんなが笑顔になる。 ・みんなが幸せになる。
３５	**〇東京出店を小田社長が断った事実を提示する。** ・お客さんたくさんいるんだよ？	・出すわけないよ。 ・北海道を代表するお菓子会社でありたいから。 ・お菓子の新鮮さを保ちたいから。 ・北海道じゃなくて全国の代表になってしまう。
４０	**〇振り返りをノートに書かせる。**	・北海道「限定」って感じにならないから。
	小田社長は、お菓子作りを通して帯広を元気にすること、北海道だけにお店を出すことによって、北海道も盛り上げたいと考えているからだ。	

第４学年Ａ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者	伊原　隆之	（札幌市立栄北小学校　校長）
授業者	山本　貴大	（札幌市立八軒西小学校　教諭）
	坂本　亜姫奈	（札幌市立伏見小学校　教諭）
助言者	三輪　史朗	（留寿都村立留寿都小学校　校長）
	小西　一寿	（士幌町中士幌小学校　校長）
記録者	井口　奈美	（札幌市立伏見小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

坂本実践については、教材が身近であり、他の地域を自分ごとにする手立てが打たれていた。「東京にお店がないからこそ価値が上がる」ことが六花亭の戦略的な取組だと思うが、その視点が子どもたちの中にあったのかという意見もあった。東京に出せば北海道限定ではなくなるため、町が元気にならない、という北海道活性化の視点を子どもたちはもつことができたと捉えている。

山本実践については、「共生」をどう捉えているのかという話題になった。日本人がしてあげるのではなく、異文化を大切にすることができることが、共生であると子どもたちは考えていた。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

坂本実践では、学習課題を飛び越えて、農業問題の学習に飛躍している、先生が出した問いに関して、子どもたちは答えているだけではなく、過去に学習したことも授業の中に表れていた。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

山本実践で取り上げたラジオニセコの取組は面白い。どうやって宮川さんに行き着いたのか、教えてもらいたいといった声があった。学びが確かなものなのか、ニセコ町のパンフレットを見せ、ニセコ町のビュープラザで情報を集めてきた。その情報に間違いがないんだな、というところをおさえることができるように教材研究を進めてきた。

助言者より

＜小西　一寿　校長＞

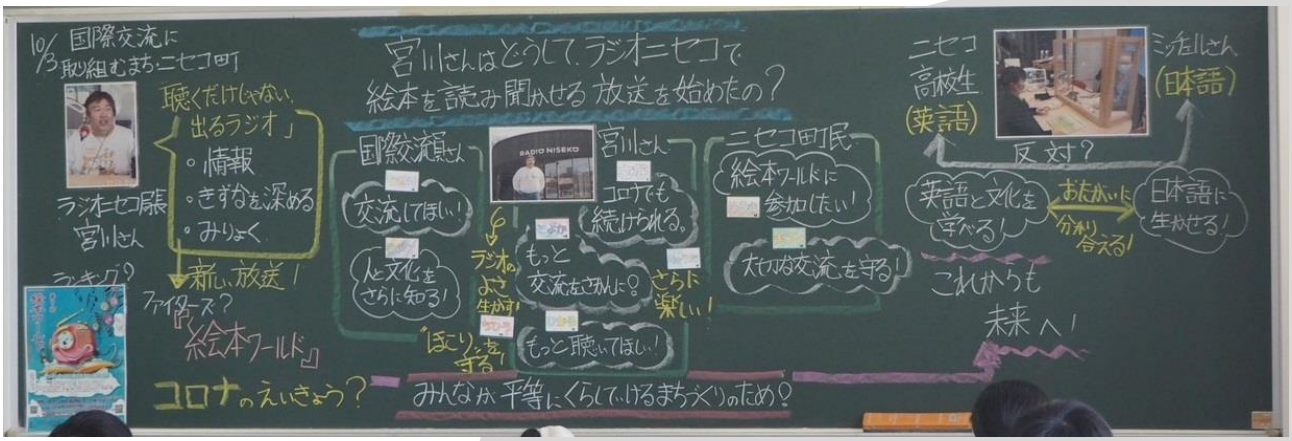
資料の提示が素晴らしい。提示の仕方によって、子どもたちが「札幌には工場が 0」子どもたちが割れんばかりの驚き、この授業は成功だと思った。課題についても、先生が広げながら進めていく様子、「えー」の感じ教えてと聞く、子どもたちがお互いに指名し合いながら進めていく、そしてみんなで練り合う様子が素晴らしかった。最後、授業が終わった後に「楽しかったね」という声が出た、ワクワクする授業を続けていってほしいと思う。普段の学級経営の成果、個性が発揮されていた。２つの授業に現れていた。

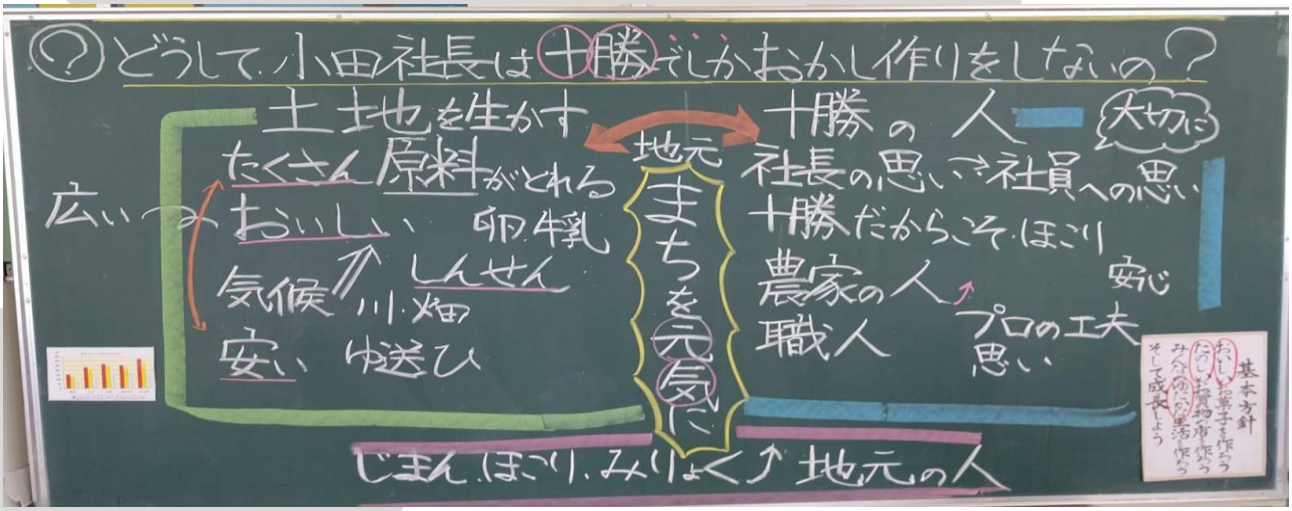
＜三輪　史朗　校長＞

人をクローズアップすることで、情に寄ってしまうが、社会科の用語を使う、地図帳を使う、縮尺を使うなど社会的な根拠を基に考えることができれば、情に寄らない社会科になるのでないか。そもそも共生社会は実現可能なのか、本当に郷土愛をもって人間は暮らしていけるのか、社会的な問題について、スモールステップで「共生」という言葉を与えてもよい。しかし社会的なジレンマもある、綺麗ごとは社会科ではない、本当のジレンマに向き合ったとき、乗り越えていける大人をつくる、この授業はそんな子どもを育てる素晴らしい授業だった。

4年 A 大会スナップ

授業の様子





第４学年　授業記録（７／８時間）

単元名　「大雪からくらしを守る～持続可能な冬のまちづくり」
授業者　栗原　聡太郎（札幌市立宮の森小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
	〇秋元克広市長が、雪かきボランティアを呼びかけていることを確認し、中学生が雪かきをしている写真を提示する。 	〇なぜ中学生が雪かきボランティアに参加しているのか予想する。 ・中学生や、子どもだったら、元気いっぱいだから若者の人がやった方が早く終わるよ。 ・おじいさんや、おばあさんだったら、疲れたり腰を痛めたりとかするから、若い子どもとかに任せると、いっぱいできるから任せていると思います。
	〇中学生が参加している割合を提示する。 ・令和２年度は全体の５％しか参加していない。 **〇本時の問いを生む。**	〇中学生の参加人数が少ないにも関わらず、秋元市長は17年間も呼びかけ続けている事実を知る。 ・少ない！ ・多分、若い人に期待しているんだよ。
	秋元市長はどうして中学生にも雪かきボランティアを呼びかけ続けているのだろう？	
	〇既習内容を基に、問いに対しての考えをもたせる。 **〇机間指導を行い、子どもたちの考えを引き出す。** **〇考えを発表させる。** **〇問い返しをしながら、子どもの発言を中学生とお年寄りの立場に分けて板書に位置付けていく。** **〇問い返しをしながら、中学生とお年寄りの絆が深まることで、どのようなよいことが生まれるかについて追究させる。** 	〇自分の考えをノートに書き、発表する。 ・中学生はお年寄りよりも元気だから、ちょっとでも雪かきの効率が良くなるから。 ・お年寄りだと、病気の人や、身体の不自由な人もいる。でも、中学生は体力もあるし、力もあるから中学生にずっと呼びかけていると思う。 ・中学校の子どもたちが手伝ってあげると、そこでお年寄りとの間に絆が生まれるから。 ・もしも、お年寄りが体調とか壊したり、調子悪くなったりした時も絆が深まっていれば助け合える。 ・雪かきボランティア同士で仲良くなる。 ・中学生とお年寄りが仲良くなって、その中学生が仲良くなれて楽しんだよって広めると、みんなやりたいなって思って、やる人が増えていくよ。 ・中学生だと後輩に教えたら、後輩がまたその後輩につないでいって、絶対に途切れないし、体力がある人につながれていくよ。お年寄りは減っていくけど、中学生の方が多くなるから、雪かきボランティアは長続きすると思う。
	〇雪かきチョボラの活動があることを提示する。 **〇宮の森小学校の直近３年間の雪かきチョボラの参加人数を提示し、吟味・検証・再考を促す。** **〇振り返りを書く。**	・やりたい！みんなでやろう！ ・ええ！ ・少ない！ ・予定がある日以外、みんなやろうね。

第４学年Ｂ部会　授業記録（６／７時間）

単元名　「北海道の特色ある地域と人々のくらし～国際交流に取り組むまち・ニセコ町～」
授業者　木田　孝紀（札幌市立桑園小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**〇ロス・フィンドレ-さんがどういう人物か確認する。** ・ロスさんの写真提示	・スキーが好きでニセコに移住してきた。 ・夏も楽しめるようにラフティングをつくった。 ・NAC というラフティングの会社をつくった。
3	**〇NAC のラフティングガイドの多くは外国人であることを確認する。** ・ラフティングやってみたい人は？ ・ラフティングガイドの写真提示 ・ラフティングの観光客は、日本人と外国人どちらの方が多かった？ ・ラフティングガイドの 28 中 20 人は外国人で 8 人が日本人	・ラフティング楽しそう。 ・でもちょっと落ちると怖い。酔いそう。 ・写真に写っているほとんどが外国人だ。 ・日本人！ ・えっ！なんで？ ・観光客はあきらかに日本人が多いのに、何でガイドは外国人の方が多いのだろう？
6	**〇本時の問いを提示する。**	
	ロス・フィンドレーさんは、どうして外国人ガイドを多くはたらけるようにしているの？	
	〇既習内容を基に、問いに対しての考えをもたせる。	〇自分の考えをノートに書く。
１７	**〇考えを発表させる。** 	・外国人ガイドは働いたときに、日本語を日本人との会話で覚えられるから。 ・外国人と日本人の交流のため。 ・外国人とふれあって欲しい。 ・ニセコに外国人がたくさんいるから。 ・外国人ガイドはラフティングを仕事にしたかった。 ・外国人とのふれあいの場をつくった。
２８	**〇日本人観光客にとっての良いことを小交流をし、考えをもたせる。**	・外国人ガイドが多いから外国語が上手くなる。 ・日本人は外国人とふれあう機会があまりないからふれあって楽しんでほしい。
３９	**〇子どもたちの考えを基に、学級のまとめを板書する。**	
	ロスさんは、ニセコを外国人と日本人がふれあえるまちにしたい！！	
４０	**〇ガイドをやめた３人の人物のその後の活動から、ロスさんの営みを再考させる。** ・キースさんは日本人と外国人が交流できるイベントを行っている。 ・ロスさんは日本人と外国人が交流できるラフティング会社をつくった。 ・峠さんは日本人と外国人が集まるカフェをつくった。	・年齢でやめたんだ。 ・キースさんはバーベキューをすることで日本人と外国人の交流の場を開いている。 ・ロスさんみたいになりたい。 ・３人にはつながりがあって、３人とも日本人と外国人がふれあえるイベントを開いている。
４５	**〇Chromebook に振り返りをさせる。**	

第４学年Ｂ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者	大畑　秀樹	（札幌市立拓北小学校　校長）
授業者	栗原　聡太郎	（札幌市立宮の森小学校　教諭）
	木田　孝紀	（札幌市立桑園小学校　教諭）
助言者	堀井　理	（羽幌町立羽幌小学校　校長）
	吉田　卓矢	（札幌市教育委員会　指導主事）
記録者	小箱　駿太	（札幌市立澄川西小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

身近な存在である中学生や、修学旅行でも行くことがあるニセコは身近な場所であり、とてもよい教材化だった。具体的人物の選び方については、自分たちに近い立場の中学生を焦点化することで「自分たちもできることをやりたい！」という思いを育むことが大切だと再認識した。社会とつながっていくという場面を、社会科としてつくっていくことが大切だということが分かった。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

単元構成について、社会参画の芽が育まれるよう一貫した単元を構成していたことを評価していただいた一方で、難しい言葉や概念が多かったのではないか、という意見をいただいた。

重要な言葉や概念は、単元の中で子どもたちがイメージしやすいよう噛み砕いたり、易しい言葉で落とし込んだりすることが必要だと考えている。子どもの目線に立って学習を進めていくことが大切だということが分かった。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

発想の転換という主張については、多くの方に賛同していただいた。「自分事」に捉えるところに難しさはあったが、身近な中学生やニセコを取り上げたことで、子どもたちの主体性につながっていたと意見をいただいた。また、どちらの教材も北海道らしさを感じるものであること、既習をもとに発言している子が多かったことなど、一定の成果が得られたと考えている。

発想の転換は教材を見る角度によって違うのではないかという意見については「発想の転換＝意外性」とも言い換えることができる問いづくりを、どのように子どもたちに落とし込み、捉えさせていくのか。その教材の見せ方が大切であるのではないだろうかということが分科会でも話題に挙げられた。

助言者より

＜吉田　卓矢　指導主事＞

今回の２本の授業はどちらも「共生」と「持続可能性」が見える授業であり、「主権者教育」とも関わる内容だった。

雪実践では、それぞれの立場の関係性に着目した発言になっていた。また、ボランティア全体における中学生の割合「２％」の見方に発想の転換があったのではないか。問いの生み方に、今回の研究のポイントがあった。

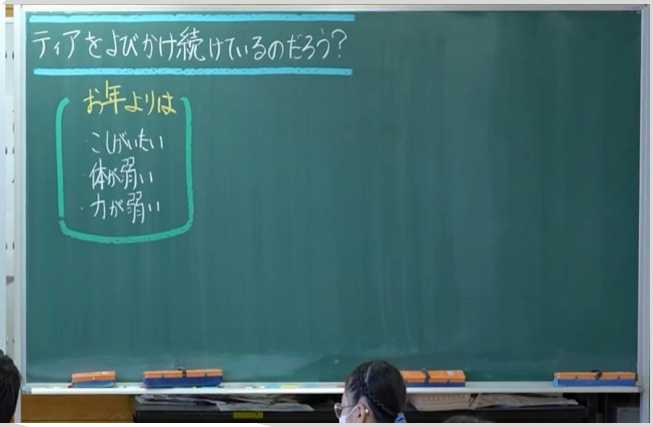
ニセコ実践に関しては、国際交流を越えて、既に日本人と外国人が「共生」している地域の学習だった。「立場」を大切にして単元を進めていたが、多様な人がいるということを調べる時間があってもよかった。そうすることで、「雇用」が必要であるという意味に迫れる授業になったのではないだろうか。

＜堀井　理　校長＞

学習指導要領の「言語能力」「情報活用能力」「問題解決能力」が大切と考えている。４年生の授業ではこれらがよく見える授業だった。自分ごととして捉えられる単元構成はとてもよかった。これからは、良い授業をデータベース化し、多くの人に伝えていってほしい。研究紀要には「北海道のよさに気付いていない」という文言がある。それは子どもだけでなく、大人も同じ。若い先生には、もっと地域を知る時間をつくっていくことを願っている。

4年 B 大会スナップ

授業の様子



第５学年Ａ部会　授業記録（６／８時間）

単元名　「情報を生かす産業～販売と運輸を結び付けた物流による地域創生～」

授業者　高田　雄平（札幌市立八軒西小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**〇前時までの学びを振り返る** ・先生がお店で牛乳を買えるのはなぜ？ ・セコマはどんな情報を集めているの？ ・情報はどこに集められているの？	・配送センターで働く人が毎日届けてくれるから。 ・商品部が商品を開発したから。 ・店舗に来ている人の顧客情報や売上情報 ・本部に集められて、全て大切な情報。
4	**〇本部に収集した全てが大切な情報であるという既習と、部署ごとに加工されて送信されている事実の比較から問いを生む。**	・それぞれ送られてきた情報が違う。 ・情報がばらばら。
	セコマの堤さんたちは、なぜ、部署ごとにバラバラな情報を送っているの？	
8	**〇既習内容を基に問いに対しての考えをもたせる。**	〇授業支援クラウドで、自分の考えをまとめる。 〇考えをもてた人同士で交流を行う。
２２	**〇考えを発表させる。** 	・商品部にどの年代で売れたか分かると企画やデザインを考えることができる。 ・配送センターではどこに商品を届ければよいか分かる。 ・店舗には気温や天気の情報が送られるから、明日、商品がどれだけ売れるかを予測できる。 ・地域で何本売れるかが分かったら発注数も予想がつく。 ・配送センターではトラックの台数を調整できる。 ・商品部に売上の情報が来るので、商品棚のレイアウトを考えることができる。 ・店舗でその日に合う商品を消費者に届けられる。
２８	**〇切り返しをしながら、必要な情報をバラバラに活用していて効率的であることを確かめる。**	・バラバラに見えるけどつながっている。 ・商品部や店舗が発注を間違えたら買えなくなる。
３２	**〇販売が終了した商品の復活を願う消費者から送られた手紙を提示する。** ・みんなが堤さんなら販売する？	・一人だけなら利益がないからしない。 ・他のお客さんは新しい商品の方がいい。
３４	**〇情報活用によって商品復活を決めたという事実を提示し理由を問う。**	・一人だけでもそのお客さんが欲しいものだから。 ・いつも利用してくれるから感謝の気持ちで。 ・他にもその商品が欲しいお客さんもいるから。
３７	**〇セコマの堤さんに、商品を復活させた理由を説明していただく。** **「全ての店舗を便利にするのも大事だが、情報を活用して一人一人のお客さんに満足してもらうこともセコマでは大切にしています。」**	・ついでに他の商品も買ってくれるから。 ・セコマは情報を効率的に活用し、一人一人のお客さんを大切にしている。 ・セコマはたった一人のお客さんの要望にも応えている。
３８	**〇本時の学習を振り返る**	
	バラバラな情報を使って効率的な仕事をしている。そして一人一人の満足も大切にしている。	

第５学年Ａ部会　授業記録（７/８時間目）

単元名　「情報産業とわたしたちのくらし」

授業者　宮崎　世司　（札幌市立資生館小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
	〇単元の学習問題を確認 ・ニュースを作っているときの天羽さんの気持ちは？ **〇大雨のニュースを見せる。** ・（視聴者投稿に着目させ）これ、必要かな？ ・天羽さんのニュースだけでもいいのでは？	・正しい情報を届けることができるように意識している。 ・危ない。 ・恐い。 ・死んじゃうかも…。 ・必要だよ。 ・いや・・・。 ・天羽さんのニュースだけだと…。
5	**〇正確さが求められる報道にも関わらず、現場で自分たちが得た情報以外の視聴者提供の情報を使うという点から問いを生む。**	・よりよいものを･･･。 自分の考えをもち、挙手をする子たちが出始める
	（自分たちで取材した情報があるにも関わらず）UHB の天羽さんは、なぜ、一般の方からの情報を活用しているのか？	
	〇既習内容を基に、問いに対しての考えをもたせる。 ・クラスルームに上がっている動画も見て考えを書くように促す。	〇ノートに自身の考えをまとめていく。（７分） 〇ノートをもとに全体交流していく（１０分） ・視聴者提供も TV 局が取材した情報もあるとお得。 ・現地の様子が分かる。
１８	**〇考えを発表させる。** ・切り返しをしながら、天羽さんが一般の方からの情報を使う理由に迫っていく。	・前と今を比較できる。 ・より「気を付けてほしい」という思いが伝わる。 ・危ないから気を付けてというメッセージ性がある。 ・投稿者の気持ちが伝わる。 ・視聴者の安全のため。 ・現状を知ってほしい。
３０	**・視聴者提供の情報をこのままつかってもいいのか、問い返す。** **・天羽さんが視聴者から提供された情報をそのまま使っていない事実を提示し、本時のまとめに迫っていく。** **（資料配付）**	・電話で確認が必要。 〇配付された資料を見て、各々交流していく。 〇気付いたことをノートに書く。
４２	誰でも情報発信できる時代だからこそ、放送局は一般の方からの情報も生かして、よりよい番組を作っている。現場に行かないときでも、正確さを大切にしている。	

第５学年Ａ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者　相馬　慎司（札幌市立しらかば台小学校　校長）
授業者　高田　雄平（札幌市立八軒西小学校　教諭）
　　宮崎　世司（札幌市立資生館小学校　教諭）
助言者　玉置　英樹（厚沢部町立厚沢部中学校　校長）
　　小川　一法（釧路市立美原小学校　校長）
記録者　澤田　敦　（札幌市立山の手南小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

具体的人物の営みから学ぶことは、やはり有効である。取り上げたい人物が必ずしも授業構造に一致しないこともある。情報の授業であるが、産業との関わりが重要になることもあり難しい場合もある。子どもにより身近に感じられる、地元で活躍している人物が取り上げやすい場合もある。しかし、５年生の学習は日本全国の産業を学ぶ学習である。３年生の産業学習とは、取り上げる人物の「質」が変わってくると考える。情報活用による地域創生の中核人物、放送局の中核を担う人物など、どのような社会的事象を創出しているのか、子どもの学びとどうつながるのかを吟味して、今後も教材化していくことが大切である。

討議の柱２
理解の質を高め､確かな社会認識を育む単元構成

単元を貫く学習問題や学習計画を共につくることで、子どもたちの学びは主体的になる。そこに、「人物の営みに着目する時間」を組み込むことで、研究内容Ⅰ・Ⅲとつながり、学びを深めることができた。情報活用の関係図、テレビ局の情報信頼度の秘密など、子どもたちの学びを深めるために有効に働いていた。また、情報の授業なのに産業の学習になっていないかという議論が多々起きる。しかし、情報活用による産業の発展という側面から考えると、産業についてもある程度理解していないと学習が深まらない。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

子どもたちの学びを主体的にすると言うが、子どもの心に火を付け、追究意欲を高めるためには、問いを生む手立てが必要であることが改めて分かった。収集・分析する情報は多ければ多い方が良いという既習と、活用する側にとってはシンプルな程効率が良いというズレ。自分たちで取材することが大切という学びと、もらった情報を使っているという比較。どちらも追究意欲が高まっていた。吟味・検証・再考の場では全店舗サービスと個別の要求、どちらも情報活用で高いサービスにつなげ、高い顧客満足度を得ていることを再考する。情報信頼度という軸から本当に一般の方にもらった情報を使っていいのか検証する。より多角的・多面的に思考するための吟味・検証・再考となっていた。ゲストティーチャーの活用を工夫することで、子どもたちの学びを更に深め、より資質・能力を育むことができると考える。

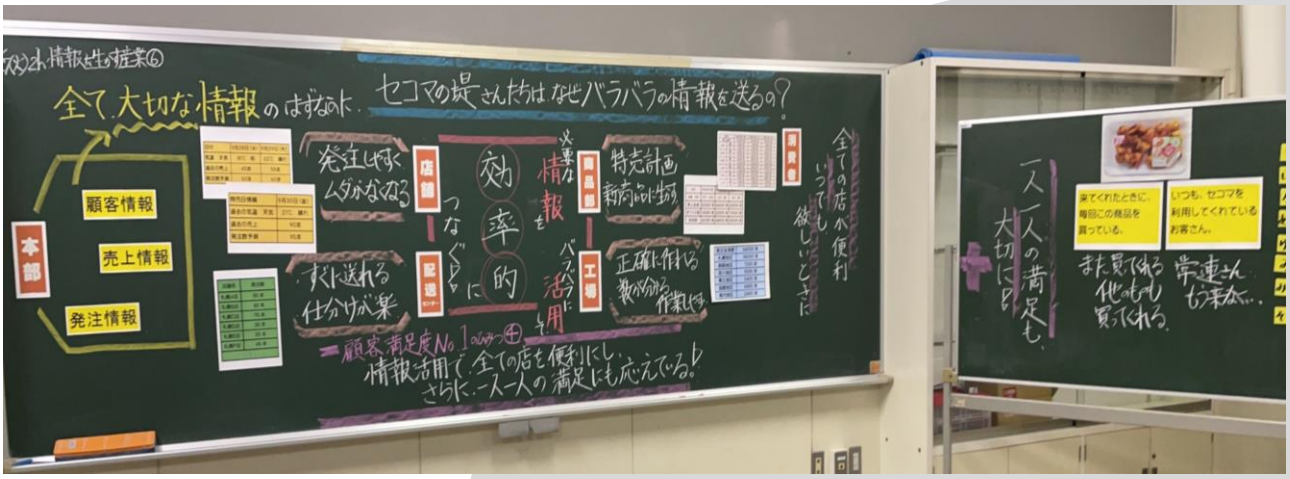
助言者より

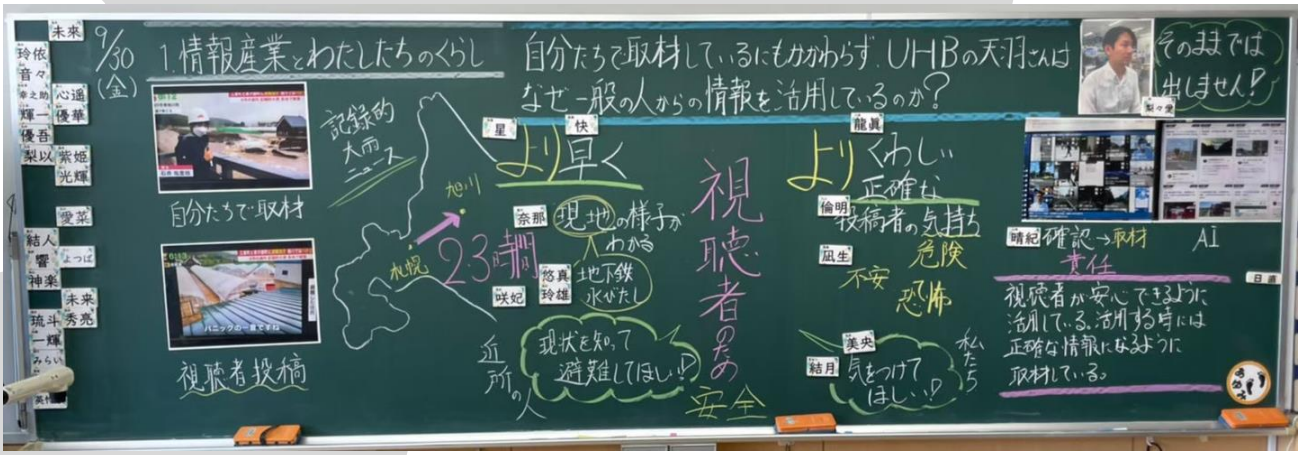
＜玉置　英樹　校長＞
宮崎先生の授業について、情報信頼度という側面から放送局の営みに焦点を当てた。放送局の学習では、取材・編集の行程だけで終わってしまうこともある。しかし、もっと調べたい、工夫があるのではないかと子どもが追究していたのは、授業者の構想があってのこと。単元の学習問題や学習計画が効果的に働いていた。

＜小川　一法　校長＞
高田先生の授業について、北海道の生活にとってセコマは重要な役割を果たしている。情報活用により自分たちの生活が支えられていることを、子どもたちは感じられていた。各部署の活用を提示したことについて、子どもたちに効果的に働き、追究することができていた。

5年 A 大会スナップ

授業の様子





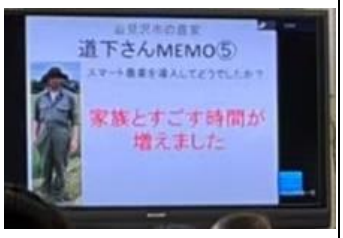
第５学年Ｂ部会　授業記録（６／８時間）

単元名　「情報を生かす産業　～販売業の発展～」
授業者　田島　吉晃（札幌市立宮の森小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
０	**○前時の振り返りと、POS システムの仕組みを確認する。** ・鈴木さんの POS システムで発展したって言えそう？	○スクールタクトの振り返りを全員で確認する。 ・POS システムを作っていなかったら今も大変。 ・POS システムで店長さんやオーナーさんの仕事が楽になった。
３	**○おにぎりは、POS システムによる設定発注＋店長判断がある事実を提示する。** ・カップ麺～設定発注で OK。 ・おにぎり～設定発注に OK したら楽だけど、店長さんは画面を見て考える。この日は、＋７０個って書き換えてから OK する。	・えっ！なんで？ ・分かった気がする！ ・次の日は、＋１００？ ・天気が関係している？
１０	**○本時の問いを提示する。** 鈴木さんは、どうしておにぎりの発注を店長さんに任せるの？	
１７	**○既習内容を基に問いに対しての考えをもたせる。** **○考えを発表させる。** 	○自分の考えをスクールタクトに入力する。 ・晴れの日は雨の日より色々なお客さんが入ってくると思うから、多く発注していると思う。 ・傷みやすい食品だから、その日の天気や状況に合わせて決める必要があると思う。 ・店長さんは、自分のコンビニのことをよく知っているから、POS システムだけに頼らないで託すことで、お店をよりよくできるようにしている。
３０	**○問い返しをして、POS システムのよさにも目を向けさせる。** ・そしたら、おにぎりだけではなく、お茶とか全部任せたらいいんじゃない？	・POS システムがあるんだから使わないと意味がない。 ・もし POS システムがなかったら、店長さんが２４時間かけ回ることになる。 ・今は商品が多くて、全部やると時間がかかるし、手間がかかるし、店長さんが大変。
３７	**○子どもたちの考えを基に、板書をまとめていく。** **○テキストマイニングを使ってキーワードを共有する。**	・POS システムを使った方が効率的。
４０	**○POS システムの特許を取らなかった事実を提示し、鈴木さんの思いに迫る。** ・鈴木さんは「POS システムの特許は取りません。」と話していたけど、今日の勉強とつながることある？	・全部のコンビニが発展する。 ・発展したら、もっと他の技術が生まれるかもしれない。 ・鈴木さんはこれまでの苦労を知っているから、他のコンビニでも使ってもらって努力が報われてほしい。
４５	**○キーワードをもとに、学習の振り返りをさせる。** POS システムを活用して発注を続けたり、店長の判断に任せたりすることで、より地域の願いに応え続ける＝便利な暮らしになっていくんだね。	○振り返りをスクールタクトに入力する。

第５学年Ｂ部会　授業記録（２４／２７時間）

単元名　「わたしたちの生活と食料生産−これからの食料生産とわたしたち−～持続可能な食料生産～」
授業者　土岐　友哉（札幌市立緑丘小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	・スマート農業ってどのような農業？ **〇スマート農業を研究している野口教授の取組について確認する。** ・どんな研究をしているの？	・スマート農業は、人がいなくてもできる農業で AI などを使っている。 ・スマートトラクターや自動田植え機、ドローン、自動給水栓などがある。
3	**〇スマート農業の農機具の価格を提示する。** ・農家の気持ちを考えさせる。 ・野口教授が研究を費やした年月を提示し、問題意識を醸成する。 ・農家にとって野口教授はどんな存在か。	・値段が高い！ ・でも嬉しい。 ・自動でできるのだからそれくらいの値段だろう。 ・新しいものの使い方を知らない。 ・30 年も!? ・農業を助けてくれる人。
8	**〇本時の問いを提示する。**	
	野口教授は、なぜスマート農業を 30 年間も進めているの？	
	〇既習内容を基に問いに対しての考えをもたせる。	〇自分の考えをノートに書く。
１８	**〇近くの児童同士で考えを交流させる。**	・スマート農業の仕方を覚えるのは大変だけど、効率化されるので便利になるからだと思う。
２０	**〇全体で考えを発表させる。** 	・人口が減ってきて働く人が減ってきているから。効率化されることで、新しい人も増えると思う。 ・何 ha もある広い田んぼを歩いて回るのは大変だけど、ドローンで短い時間で仕事できるから。 ・新しく農家になった人にとっても作業しやすくなる。 ・昔は手作業で 152 時間かかった作業が、最近は 22 時間になり、これからももっと効率化することができそうだ。 
	〇農作業を動作化させることで、作業の変化を捉えさせる。 **〇問い返しをしながら、学級としての考えをまとめる。**	・未来は人がいなくても動く機械のおかげで、今より楽になると思う。 ・未来に向けて使っていきたいな。
３５	**〇スマート農業を導入した農家へのインタビューを提示する。** ・全国に広がっている？	
４０	**〇野口教授へのインタビューを提示する。** ・小学生に来てもらいたいんだって。なんでだろうね。 ・考えをもてるように自由に交流させる。	・だって、便利だから、北海道だけでなく、日本中で使いたいんだと思う。 ・従来の農業から変わったことを知ってもらって、家族の時間も大切にできるよ。と伝えたいんだと思う。 ・小学生が見学にくることで、人手不足の農業に興味をもってもらいたいんだと思う。
４３	**〇本時の学習を振り返る**	・未来の農業へとつなげていきたいから。
	野口教授は日本の食料生産の未来を考えて、スマート農業の研究を進めているんだね。	
	・次時予告	・日本の農業の未来を見てみたい！

第５学年Ｂ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者　石川　篤司（札幌市立札苗緑小学校　校長）
授業者　田島　吉晃（札幌市立宮の森小学校　教諭）
　　土岐　友哉（札幌市立緑丘小学校　教諭）
助言者　有村　宏紀（夕張町立ゆうばり小学校　校長）
　　新栄　裕　（北海道教育庁後志教育局　主任指導主事）
記録者　内藤　広大（札幌市立幌南小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

両実践とも、取り上げた人物の営みに対して共感的に学ぶ子どもの姿が見られた。田島実践では、POS と人の判断が組み合わさることでより消費者の願いに応えられるということが理解できていた。情報単元として鈴木さんの営みに比重を大きくするのではなく、情報活用から販売業の発展につながる学びに時間をかけてもよかった。土岐実践では、生産者、研究者を含めた協力者、消費者などの相互関係を捉えられる教材化であった。子どもは「生産者はどうしてスマート農業を…」に対して疑問をもつ方が自然なのではないか。北海道の教材化は素晴らしいが、今後は議論を通して社会的問題に対して自分事として捉える学びも考えていけるとよい。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

田島実践では、体験活動を通して POS の価値を実感できていた。単元の終末をオープンエンドで終えるのではなく、「本当にこれで良いのか」という視点をもたせてもよかったと思う。土岐実践では、大単元を見通して構成されているので多面的に追究する子どもの姿が見られた。持続可能な食料生産に向けた取組は AI だけでないので、デメリットも含めたより広い視点から今後の食料生産を見つめる場面があるとよい。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

田島実践では、1 週間の発注数の提示から子どもの問いを丁寧に生むことができていた。考えをつなぐ場での子どもの発言が生活経験を基にした想像からの意見となっていた。土岐実践では、課題の 30 年間もという期間に疑問をもつ子は少なかったと感じられた。考えをつなぐ場での時間軸を基にした追究が、未来に向けた食料生産への学びを確かなものにしていた。吟味・検証・再考の場での野口教授の言葉から事象をより自分事として捉え、次時の見学への期待感を高めていた。

助言者より

＜新栄　裕　指導主事＞

両実践とも、未来を見据えた新しい価値に向けた人物の営みに、子どもたちは惹き付けられていた。コンビニの情報活用のみで終始するのではなく、コンビニの鈴木さんの事例から販売業全体の発展につなげていた。農家だけでなく、JA や協力者など農家を支える人にも目を向け、学習指導要領の「人々の協力関係」に合致していた。本時ではどちらも丁寧に問いを生んでいた。事前に単元を通して学習計画に沿った情報収集をしていたからこそ、本時に多様な意見が出されていた。今後は評価材料や評価方法をより明確にしていけるとよい。

＜有村　宏紀　校長＞

両実践とも、教師が学びのファシリテーターとなり、子どもの発言・対話を通して授業が進んでいた。まさに主体的・対話的で深い学びであった。鈴木さんや野口教授はすごいで終わるのではなく、人物の思考が社会とどう関わってどう変化しているのかが見えるようにすることが大切。田島先生の概念崩し、揺さぶりの発問が見事で、子どもの学びを深めていた。土岐実践では、子どもが課題を言語化していたので、問いが自分のものになっていると感じた。北海道は社会認識を大切にしている。社会認識を正しく捉える力が、社会の本質を捉える上で重要なのである。

5年 B 大会スナップ

授業の様子

第６学年Ａ部会　授業記録（７／１０時間目）

単元名　「明治の国づくりを進めた人々　幌内鉄道　～近代化を支えた基盤とは何か～」
授業者　鵜沼　吉史（札幌市立八軒西小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**○パワーポイントで既習を確認する。** **○新橋―横浜間と大阪―神戸間に鉄道が敷設されたことを提示する。** ・二つはどんな場所？	 ・どちらも栄えている場所。大都市だ。 ・次はどこだろう？・名古屋かな。もしかして札幌？
2	**○黒田清隆が小樽―幌内間に幌内鉄道を敷設したことを提示する。** ・どことどこを、つないだと思う？	・えっ！まだ開拓の途中の北海道に！ ・幌内ってどこ？　・札幌駅もすごく小さい。 ・小樽は港がある。何か運んだのかな。
8	**○社会的事象の意味を考える問いを提示する。**	○問いをタブレットに打ち込む。
	（それまでは近代化の進んだ都市に鉄道を造っていたのに）黒田清隆は、どうしてまだ開拓の進んでいない北海道に鉄道を造ったのか？	
	○自作資料を配布し、それを基に問いに対して考えをもたせる。 **○考えをつなぐ場で発表させる。**	○自分の考えをタブレットに打ちこむ。 ○自分の考えを、全体の場で発表する。 ・幌内は炭鉱があり、石炭がたくさん採れていた。 ・札幌には屯田兵がたくさんいて、栄えていた。 ・小樽は港があり、石炭を日本各地に運べる。
２９	**○問い返しをしながら関連付け、深める。** 	・幌内の石炭を札幌に送って製品を作る。そして、小樽に運んで貿易をしていたのでは。 ・札幌は、北海道の中間地域で、開拓の中心地。 ・石炭を全国に運ぶことで、工場や船を動かす燃料になった。それが、製品の製造に役立った。 ・北海道の開拓を進めるため。そして、日本全体の発展のために幌内鉄道をつくった。
３２	**○ここまでのまとめをつくる。**	○まとめに用いるキーワードを発表する。
	幌内の石炭を北海道の発展と新しい国づくりに生かすために、北海道に鉄道を造った。	
３５	**○鉄道の路線図と炭鉱のつながりをしめす図を提示する。** **○生糸の生産地や工業都市と、鉄道のつながりをしめす図を提示する。**	・たくさんの石炭を運ぶことで、全国の工場を動かすことができる。 ・日本で作れる製品が増える。外国にも負けないものができる。
４２	**○実物の石炭を提示し、鉄道の価値を再考させる。**	○実際に石炭に触れる。 ・石炭はとても重い。　・人の力で運ぶことは大変だ。 ・鉄道だから、大量に効率的に運ぶことができた。おかげで、日本の発展につながった。
４５	**○本時の振り返りを打ちこませる。**	
	全国各地の港や工場、炭鉱を鉄道で結ぶことが、殖産興業を支える力となり、日本が発展した。	

第６学年Ａ部会　授業記録（７／１０時間）

単元名　「明治の国づくりを進めた人々」
授業者　中田　充（札幌市立山鼻小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**〇パワーポイントで既習を確認する。** ・（札幌の開拓の写真）ここに黒田清隆さんが官営工場を建てることに決めました。どんな官営工場だと思う？ ・どうして、開拓に必要な物って思ったの？	・食品、生活に必要な物。 ・開拓に必要な物。 ・武器。 ・豊かになって、開拓がどんどん進むと思ったから。 ・衣食住に必要な物。
2	**〇黒田清隆がビール工場を造ったことを提示する。** 	・えっ、ビール？! ・黒田さんが飲みたいだけ…？ ・なんでビール？ ・なんで…だってビールですよ。なんか、違いませんか。
7	**〇社会的事象の意味を考える本時の問いを提示する。**	・開拓には必要じゃない。 ・売れるから？
	（まだ開拓して間もないのに）黒田は、なぜ札幌にビールの官営工場を建てると決めたの？	
１０	**〇自作資料を配付し、それを基に問いに対しての考えをもたせる。** **〇子どもの考えの根拠を引き出す関わり。（机間指導）**	〇自分の考えをノートに書く。自分の考えのキーワードをスクールタクトに打ち込む。 ・イギリスでビール工場を視察したから。 ・原料が北海道にあって、輸送費が掛からないから。
１８	**〇キーワードを基に、子どもの考えをつないで発表させる。** ・黒田は、ビールの官営工場を建てたけど、日本酒じゃダメだったの？ ・輸出するためなら、ラベルは全部英語の方がよくない？ **〇問い返しをしながら、子どもの考えを関連付けて深め、まとめをつくる。** ・因みにここは（板書を示して）何の発展？	・ラベルが英語だから、外国に売って外貨を獲得したら豊かになる。 ・ホップや他の材料も北海道の気候に合っていたから。 ・日本酒は日本だけどビールは外国の文化だから、売れると思った。 ・日本にも売るつもりだった。 ・日本が造ったよってアピールするため。 ・一等国になるための発展。経済力。 ・こっちは楽しむためと外国へのアピール。生活が豊かになったってこと。
	経済力・産業の発展と生活の豊かさ、両面を発展させようとしていた。	
３３	**〇内国官業博覧会にビールが出品された事実を提示する。** 	・5 本しか出品しなかったの？もっと売ればいいのに。 ・日本人すげぇって思ってもらう。 ・生活を楽しむのと経済・金銭面の豊かさの両方。 ・こっちは娯楽のため、人の豊かさと国の豊かさ。
４０	**〇本時の振り返りをスクールタクトに打ち込ませる。**	・日本の経済、心が豊かになって一等国に近付いた。 ・黒田は、経済と人々の豊かさのために工場を建てた。
	黒田がビール工場を建てたのは北海道と日本の経済や生活の発展、国・国民の豊かさのため	

第６学年Ａ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者　菅野　光明（札幌市立稲穂小学校　校長）
授業者　鵜沼　吉史（札幌市立八軒西小学校　教諭）
　　中田　　充（札幌市立山鼻小学校　教諭）
助言者　三浦　一路（旭川市立東五条小学校　校長）
　　冨久尾　崇（北海道教育庁石狩教育局指導主事）
記録者　荒川　　恵（札幌市立西宮の沢小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

北海道開拓に関わる様々な人物がいる中で、子どもに追究の視点として与えるべき人物は黒田清隆がよいと考えた。黒田は現在も北海道に残る多くの施設建設に携わり、北海道の発展に寄与しただけでなく、港と石炭とを結び付ける鉄道を敷設し、明治の近代化を支える仕組みを作るなど、北海道の子どもたちに身近な存在であると共に、明治維新の成功に貢献した人物である。黒田の営みを取り上げたことで、意欲的に追究する姿を生むことができたのではないか。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

中田実践では、教師が求めていた「文化発展」という言葉より、子どもから出された「生活の発展」「人の豊かさ」といった言葉の価値の方が高かった。両実践とも、歴史教育でありながら、身近な題材から空間的広がりをもって自分と繋げ広げていくことができる教材化であった。どちらも明治を扱っているが、教材化の視点によって単元構成が変わる。そして、追究の方向性が変化することで、思考の流れと単元終末の子どもの姿が変わるということが明らかになった。また、単元を通した ICT の活用によって、協働的な学びの場が保障され、子どもが見方考え方を深めていく上での有効な手立ての一つとなっていた。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

吟味・検証・再考の場として、鵜沼実践では、幌内から全国への空間的な広がりを捉えさせられた。幌内鉄道を教材化することで鉄道と鉱山とのつながりという今までとは違う視点を見せることができた。中田実践では、大久保利通が主催した内国勧業博覧会を取り上げ、単元前半で学んだ全国規模で近代化を進めた人物へと焦点をあてることで、北海道からまた全国へと視点を広げる形の授業が組まれ、全国への繋がりを見ることのできる一時間となった。また、両実践共に「近代化を支えたものは」「豊かさ」といったサブテーマを設けたが、そのことによって社会的事象の意味を考え、新たな社会認識や社会参画の芽を獲得することができた。理解の質も深めることができたのではないか。

助言者より

＜冨久尾　崇　指導主事＞

黒田清隆と鉄道の敷設、ビール工場の建設という具体的な社会的事象を通して学習することによって、子どもたちは諸改革の意味や殖産興業といった言葉を具体的なイメージをもって理解することができていた。ただ覚えるではなく、単元構成を踏まえて理解の質を高めたことが成果である。北海道における具体的な事象が明治維新の改革全体にとってどうだったのかと視点を広げることで、日本全体の近代化における意味を考えさせることに繋がる。課題設定場面の工夫や子ども自身に問いを発見させることで、歴史の意味を自ら考えることができる子どもに育つ。また、ICT は個別最適な学びと協働的な学びに於いても重要なツールであり、目的に応じて最大限に活用し、授業改善すべきである。

＜三浦　一路　校長＞

歴史の学習では身近に考えることが難しい北海道だが、開拓が本格化した明治初期から北海道の事象にフォーカスすることは、今の自分との繋がりを実感できるという意味で極めて重要な価値がある。そして、吟味検証再考の場では再び日本へと繋がる最高の流れだった。意味追究の際の子どもの思考を支えるエビデンスをどのように考え、本時までに獲得させるのか、主体的な学び、個別最適な学びと考えたとき、単元の学習問題の解決のために本時にはどのような価値があるのか、どれだけ単元の学習問題に近付いたのかということをメタ認知するような評価活動が必要だったのではないかと改めて感じた。

6年A大会スナップ

授業の様子

第６学年Ｂ部会　授業記録（７／１０時間）

単元名　「明治の国づくりを進めた人々」
授業者　勝谷　亮太（札幌市立宮の森小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**〇スクールタクトで既習を確認する。** ・北海道の開拓に必要なものは？	・みんなが住む建物が必要。 ・お金を稼ぐ工場も必要だ。　・食べ物も必要だ。
2	**〇黒田清隆が札幌農学校を建てたことを提示する。**	・えっ！なんで工場じゃなく、わざわざ学校を？ ・開拓をできる人を育てるためじゃない？
4	**〇社会的事象の意味を考える問いを提示する。**	〇問いをタブレットに打ち込む。
	（開拓に関係なさそうなのに）黒田清隆は、なぜ、札幌農学校を設置したのだろう？	
6	**〇自作資料を配付し、それを基に問いに対しての考えをもたせる。**	〇自分の考えをタブレットに打ち込む。 〇自分の考えをペアで交流する。
１６	**〇ペア交流で考えを交流させた後、考えをつなぐ場で発表させる。** 	〇全体の場で考えを発表する。 ・他の国に負けないために、富国強兵を実現するには、学制（学校）が大切だから。 ・耕された心田(学生)が、よい国づくりに必要だから。 ・英語・農学・土木・測量学など開拓に生かせるから。 ・発展している外国の教官から様々な事を学ぶため。 ・農学校を卒業した後は、５年間開拓使に勤務すると書いてあるから、開拓に貢献できるから。
	〇問い返しをしながら関連付け、深める。 ・本当に日本の発展につながっている？	・人を育てることが、北海道の開拓、そして日本の発展につながっているよ。
３５	**〇ここまでのまとめをつくる。**	〇まとめに用いるキーワードを発表する。
	黒田清隆は、札幌農学校を設置し、優秀な学生を育てて北海道だけではなく、日本全体の発展につなげた。	
３８	**〇札幌農学校第２期生の新渡戸稲造を提示する。** **〇新渡戸稲造についての自作資料を配付し、読みとったことを発表させる。**	・５０００円札の人だ！ ・クラークなどに教わっている。 ・国際連盟事務局次長も務めている！　・すごい！ ・教わる立場から教える立場に変わっている。
４２	**〇新渡戸の活躍や、教授となり教える立場になっている事実から、札幌農学校の価値について再考させる。** ・札幌農学校の設置には意味があった？	・卒業生の他の日本人も教官となっている。 ・日本人の学生が育つと外国の教官はいらなくなる。 ・代々、農学校の教えが伝わっていくことにつながる。 ・日本がこの先もずっと発展していける。
４５	**〇本時のふり返りを打ちこませる。**	〇タブレットにふり返りを打ちこむ。
	黒田清隆の設置した農学校のおかげで学生が育ち、日本の発展や未来の発展につながった。	

第６学年Ｂ部会　授業記録（７／１０時間）

単元名　「明治の国づくりを進めた人々」
授業者　石本　歩（札幌市立緑丘小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
０	**〇パワーポイントで既習を確認する。** ・黒田清隆が新たに官営工場を造りました。みんなだったらどんな官営工場を造る？	・武器でしょ！武器を作ってロシアに対抗する ・お金を稼ぐ工場も必要だ。　・製糸場を造る
２	**〇黒田清隆はビール工場を造ることを提示する。** ・自分が黒田さんだったらどこにビール工場を造る？	・えっ！ビールじゃ戦えないよ！ ・明治政府の近くに！人通りが多いから ・札幌、北海道に！
４	**〇黒田清隆が官営のビール工場を札幌に建てたことを提示する。** ・初めて当時の札幌を見たときどんなところって言っていた？	 ・田舎中の田舎。 ・発展途中だった。
１０	**〇社会的事象の意味を考える問いを提示する。**	〇問いをノートに書き込む
	（開拓して間もないのに）黒田清隆はどうしてビールの官営工場を札幌に造ることに決めたの？	
	〇自作資料を配付し、それを基に問いに対しての考えをもたせる。 **〇ペア交流で考えを交流させた後、考えをつなぐ場で発表させる。** 	〇自分の考えをタブレットに打ち込む。ノートに書き込む。 〇自分の考えをペアで交流する。 〇全体の場で考えを発表する。 ・人口が増えて、発展してロシアに南下政策に対抗するため。　・工場の周りが発展していく。 ・交通量も増える。 ・ビールは海外だと当たり前。輸出してお金にする。 ・内面は？　・ビールを飲む文化が広がる。
３５	**〇問い返しをしながら関連付け、深める。** ・ビールを造れることはアピールになるの？	・ビールを造る技術があるという自信がもてる。 ・無理に背伸びしなくても作れる。 ・国が成長した自信に！
３８	**〇まとめをつくる。**	・ロシアに舐められないという自信・文明国の象徴。
	黒田清隆は、国の近代化を外面と内面の両方から進めたかったんだ。	
４０	**〇ビール工場に明治天皇が来たことを提示する。**	・明治天皇まで情報が行くほど有名になった。
４２	**〇ビールの生産量、消費量、輸入量のグラフを提示する。** 	・輸入より生産量の方が上がっている。 ・消費量が上がっている。 ・輸入量は減っている。 ・飲む人が増えたということはビールが当たり前になったということだ。　・技術力が上がったんだ。 ・原材料も増え、北海道のレベルが上がった。
４５	**〇本時のふり返りを打ちこませる。**	〇タブレットにふり返りを打ちこむ。
	やっぱり国産のビールが増え、飲む人も増え、外面と内面の近代化が進んだんだね。	

第６学年Ｂ部会　授業分科会記録と実践の振り返り

司会者　菅原　隆司（札幌市立百合が原小学校　校長）
授業者　勝谷　亮太（札幌市立宮の森小学校　教諭）
　　石本　歩　（札幌市立緑丘小学校　教諭）
助言者　丹野　聡　（標茶町立川北小学校　校長）
　　細部　善友（苫小牧市立開成中学校　校長）
記録者　小松　薫　（札幌市立月寒小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

黒田清隆という人物を扱うこと、日本の近代化として、北海道開拓を扱うことで、子どもたちが自分事として、歴史に向き合い、夢中になって学べていたのではないか。また北海道開拓が、明治政府が近代化を目指して行った営みであるという認識は黒田清隆を扱ったからこそ、至ることができたのではないか。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

勝谷実践では、「日本の近代化には何が大切か」、石本実践では、「外面･内面の両面から近代化を捉える」とサブテーマを設定した。本時では、サブテーマに立ち返って、子どもたち自ら視点を変える場面も見られたり、前時の学習の言葉をたくさん使っていたり、単元としてつながりのある学びが見られた。単元の学習問題だけではできないことも、サブテーマを設定することで可能になるかもしれない。また、内面･外面の捉えを、仕組みや制度を外面、考え方や文化を内面とおさえることも考えられる。今後見方を整理していくとよい。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

勝谷実践では、吟味･検証･再考の場で、新渡戸稲造を扱った。札幌農学校で育った人材が世界で活躍していることから子どもたちが札幌農学校の価値を再確認できていた。ただ、一人の人物の功績だけを扱うのと、様々な人物が世界で活躍している事実を扱うのでは意味が異なってくる。石本実践では、ビールの普及率のグラフの推移とビール工場に天皇が視察しに来た事実から、外面･内面の近代化の両方を明らかにすることができていた。

助言者より

＜細部　善友　校長＞
両実践ともに、中学校の学習指導要領から見て、指導すべき内容がすべて単元の指導計画に位置付いて良い。勝谷実践では、サブテーマを「日本の近代化には何が大切なのか」と設定しているが、当時の人々が何を必要としていたのかを授業の最後に問い直すことで、一時間のまとまりが単元のまとまりになったのではないか。石本実践では、「ビールで戦争はできない」という子どもの発言があった。ビールは武力にはなり得ないが、経済力を高めることには寄与し、欧米と肩を並べる一つの指標としてビールの生産が定着するのではないかと予想しながら授業を進めると、子どもたち自身でまとめられたのではないか。

＜丹野　聡　校長＞
子どもたちの主体的に学ぶ姿勢、また主体的に学ぶ能力がどちらも見られた授業であった。黒田を教材化することで、幌内鉄道、札幌農学校、ビール工場、同じ人物を扱うが、違う実践になるという可能性を見ることができた。これは市、道社連がいままで研究してきた教材の力が十分発揮されていたということにほかならない。これからは、思考･判断･表現を育むために、子どもたちが歴史を学んだ自分たちと向き合うという経験をさせること、理解したことをどう活用するか、違う文脈でも学んだことを活かせるかが大切になってくる。そうすることで、もっと見方が広がってくるのではないか。

6年 B 大会スナップ

授業の様子

第４学年　特設提案授業　授業記録（10／13 時間）

単元名　「わたしたちのくらしと電気～24 時間いつでも使える電気を支える人々～」
授業者　河原　秀樹（北海道教育大学附属札幌小学校）

分	教師の関わり	子どもの活動・反応
0	**○鹿追の喜井町長が牛のふんでバイオガス発電に取り組もうとした事例を紹介。** ・町長の仕事は？ **○町民の声と町長の判断から問いを生む。** ・町民は成功するか分からないのにお金を出すのを反対。	 ・まちをよりよくすること。
5	・町民の思いを聞いて、町長は町全体でバイオガス発電にチャレンジすると宣言。	・町民は悲しんでる。困った。 ・いいとも悪いとも言えない。 ・やってみた方がいい。
	喜井町長は、なぜ町全体で牛のふんを原料にしたバイオガス発電にチャレンジするの？	
１７	**○牛のふんを提示する。** **○既習内容を基に問いに対しての考えをもたせる。**	○自分の考えをノートに書く。 ・くさい！ ・動物園や卵の腐ったにおい！ ○ノートに自分の考えを書く。
２８	**○考えを発表させ、視点ごとに板書にまとめる。** **○１日に出る牛のふんの量を提示。** 	・人の４倍の牛がいるからそれを利用する。 ・電気代が高くなっているから、少しでも減らせるようにこの地域でしかできないことをやろうと思った。 ・自分のまちで電気を自給できるように。 ・牛が多いということはふんが多いから、捨てるんじゃなくて発電に使おうとした。 ・１日６０ｋｇが２万２千頭。くさすぎ！ ・前の学習でごみを減らすってやったから再利用する。 ・北海道 SDGｓに「エネルギーをクリーンに」ってあるからそれにつながる。 ・牛がいる限り何回でも発電できる。
４５	**○喜井町長のメッセージ動画を提示。** **○バイオガス発電に取り組んだ後の町民の声を提示。** ・バイオガス発電は町の誇り。 ・もっとバイオガスプラントを。 **○今日の授業をまとめる。**	・未来のことを考えている。 ・いつまでも電気を作り続けられる。 ・町長すごい！ ・厄介物のふんがいいものに。
	反対があったけれど、逆転の発想でバイオガス発電にチャレンジしたことが世界の問題を解決して、電気をいつでも作り続けられることにつながる。	
		○ノートに振り返りを書く。 ・町長は町民や世界のことを考えていてすごい。 ・逆転の発想がすごい。 ・他の場所でもやっているところがあるの？ ・豚のふんでも発電をしているの？

特設提案授業部会　授業分科会記録

司会者　千葉　一博（札幌市立三里塚小学校　校長）
授業者　河原　秀樹（北海道教育大学附属札幌小学校　教諭）
助言者　松尾　則明（札幌市立清田南小学校　校長）
　　橋本　　隆（札幌市立川北小学校　校長）
記録者　岩渕　啓佑（札幌市立ノホロの丘小学校　教諭）

討議の柱１
社会的事象を創出する人物の営みに学ぶ教材化

本単元は飲料水・電気・ガスの選択学習である。「持続可能性を高め、未来を切り拓いていく子ども」を育成するためには電気を選択し、鹿追町のバイオガス発電を取り上げることが有効と考え、教材化を図った。参会者からは、電気は子どもの生活に欠かせないものだが、目に見えにくいことや発電方法が多様にあること、世界情勢が関わる点での教材研究の難しいことなどが指摘された。一方で、安定供給、安全性、価格、CO2 排出量など、飲料水よりも多面的な追究のしやすさを肯定的に捉える意見も出された。

討議の柱２
理解の質を高め、確かな社会認識を育む単元構成

参会者からは調べる活動を充実させるための工夫について質問が多く出された。単元全体では、調べる方法を教科書や副読本、北海道電力の HP などに絞ったことで、個々の追究がねらいに沿ったものとなった。調べる活動の合間には、互いに分かったことを伝え合ったり、スライドを活用してまとめたりすることで授業時間以外に見合える工夫がされていた。また、子どもたちの社会経験や知識、調べる技能の差を埋めて、理解の質を高めるために、発電所のオンライン見学やゲストティーチャーの講話という体験的かつ情的な学びが単元の中で共通の土台として積み上げられていたのが有効だった。

討議の柱３
社会的事象の意味を考える一時間

本時は既習の活用が中心だったが、後半場面では子どもが授業者の想定を超え、他の動物のふんを活用した発電の実現可能性や、「自分達でもできるかも！」という社会参画の意識の高まりが分かる発言があった。参会者からは、牛のふんの臭いに対しての子どもの気付きや、この学習で水素を使った発電を取り上げることの可能性についての意見が出された。子どもたちは既習の中で、町がふんの臭いで困っていることに気付いていたが、本単元でのねらいとの整合性や子どもたちの学習の様子から、取り上げる難しさがあった。

助言者より

＜松尾　則明　校長＞

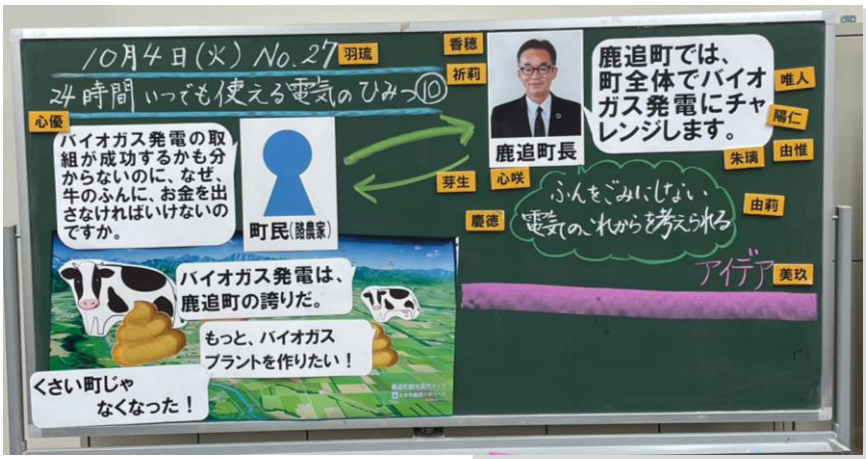
柔軟な発想で行動する人物や新たな価値を見出す創造的な営みへの出会い、問題意識を醸成する要素、学びを揺さぶる働きかけという３つの条件や、実感を伴う学習内容、高め合う学習集団があったことで、発想の転換がなされた。「～なのに、なぜ」だけでなく「きっと～だろう」という見通しが単元を通してあったことで追究が進み、教師の揺さぶりによって、視野に広がりが見られた。これらを知的・情的に迫ることで、よりよい社会科の学びになっていく。

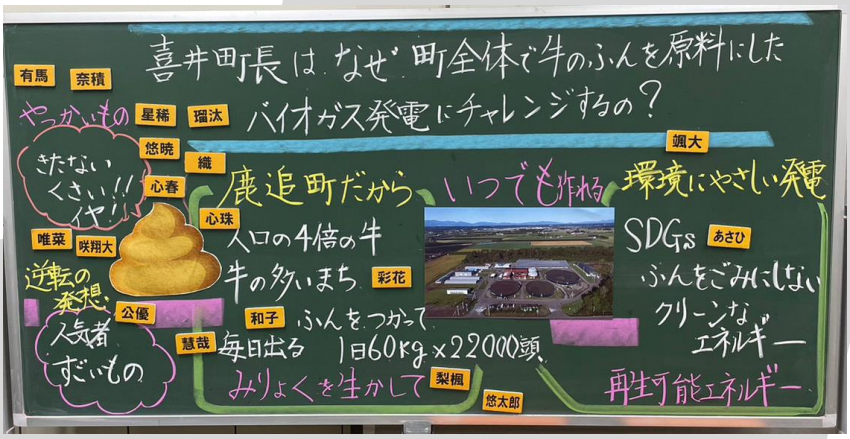
＜橋本　　隆　校長＞

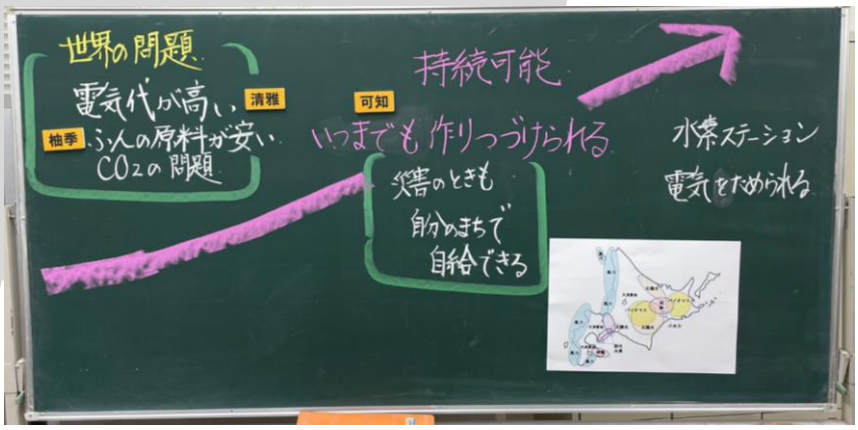
人物の営みを単元の軸にして取り上げることで社会的事象の意味を深く考え、将来の夢や憧れにつなげていた。子どもたちは、町長や町民の立場から、環境や SDGs との関わりも考えながら多角的に発言していた。吟味・検証・再考の場では、町の誇りとは何かということを、もう少し深めてもよかった。そうすれば、「臭いを気にしないで酪農を続けていける」など、発電が地域の産業の発展につながっていることに気付けたのではないか。

特設部会大会スナップ

授業の様子







北海道大会運営組織

全国小学校社会科研究協議会
会　　長　和田　幹夫
事務局長　諸角　哲男

＜大会実行委員長＞
北海道社会科教育連盟委員長
白崎　　正（八軒西小：札幌）

会場校校長（札幌）
八軒西小学校　白崎　　正
宮の森小学校　加瀬　富久

＜大会副実行委員長＞

大垣　秀彦（千代田小：旭川）
三和　史朗（留寿都小：後志）
橋本　　隆（川 北 小：札幌）
松村　隆志（手稲中央小：札幌）
菅野　光明（稲 穂 小：札幌）
水野　秀哲（富 原 中：釧路）
千葉　一博（三里塚小：札幌）
金澤　　敦（札 苗 中：札幌）
堀井　　理（羽 幌 小：留萌）
三浦　　聡（手稲東小：札幌）
長瀬　雅一（あさひ小：函館）
松尾　則明（清田南小：札幌）
石川　篤司（札苗緑小：札幌）
蟹谷　正宏（愛 別 中：上川）

大会実行委員会

【大 会 事 務 局】※大会事務局は札幌で構成

＜事 務 局 長＞平澤　淳志（円 山 小）
＜事務局次長＞相馬　慎司（しらかば台小）
田丸　明史（手稲西中）
阿知良　学（屯田西小）
小原　祥枝（幌 西 小）
伊藤健太郎（発 寒 小）
山本　秀夫（真 栄 小）
矢野　智之（米 里 中）
佐野　浩志（山 鼻 小）
近井　祐介（資生館小）
鈴木　　直（月 寒 中）
大畑　秀樹（拓 北 小）
菅原　隆司（百合が原小）
小野　達也（藻 岩 小）
七戸　宏行（桑 園 小）

【大会実行委員】※大会実行委員は札幌で構成

＜会計部門＞◎石川　篤司（札苗緑小）
藤原　恵美（本 町 小）
＜総務部門＞◎片桐　智樹（真駒内桜山小）
丸尾　英紀（新 光 小）
木田　孝紀（桑 園 小）
＜広報部門＞◎瀧野　隆太（手稲鉄北小）
土岐　友哉（緑 丘 小）
工藤　拓海（西野第二小）
＜情報部門＞◎芳賀　大介（新琴似小）
玉山　大補（苗 穂 小）
小沼明日騎（伏 見 小）
石山　雅人（北　　小）
中里　彰吾（中 央 小）
＜会場部門＞◎多田　公洋（福井野小）
武居　康介（ノホロの丘小）
髙田　正矩（幌 南 小）
金野ひろの（発寒西小）
＜研究部門＞◎斉藤　健一（伏 見 小）
宮武　基理（八 条 中）
山田　　透（信 濃 小）
樋渡　剛志（附属札幌小）
山本　勝洋（美しが丘緑小）
伊藤　拓真（東苗穂小）
中田　　充（山 鼻 小）
小林　弘明（厚別南中）
西澤　英剛（東白石中）
渡辺　智弘（開成中等）
○松村　隆志（手稲中央小）
小谷　洋史（石 山 中）
○佐々木英明（米 里 小）
竹内　　縁（桑 園 小）
○岩渕　啓佑（ノホロの丘小）
高田　雄平（八軒西小）
小松　　薫（月 寒 小）
○宇野　太士（幌 北 小）
吉野　貴宏（栄 西 小）
佐藤　輝宗（芸術の森小）
居鶴　裕人（稲 穂 小）
○田島　吉晃（宮の森小）
宮崎　世司（資生館小）
森脇　大樹（資生館小）
◎竹村　　正（山鼻南小）
鵜野伊久磨（澄 川 小）
石本　　歩（緑 丘 小）
千葉　拓士（新札幌わかば小）
澤田　　敦（山の手南小）
似内　心悟（太平南小）
坂本亜姫奈（伏 見 小）
今　　直道（北野台中）
長井　竜太（光 陽 中）
伊原　隆之（栄 北 小）
上木　留理（大谷地東小）
岩倉　智也（幌 西 小）
溝渕　和広（福 住 小）
市川　恭史（太 平 小）
鈴木　悠也（北九条小）
細川　健裕（開拓の村）
鵜沼　吉史（八軒西小）
大矢　睦美（北 郷 小）
東　　昌吾（星置東小）
河嶋　一貴（西野第二小）
竹澤　純一（平 和 小）
黒田　健太（緑 丘 小）
大坂　　聡（丘 珠 中）
河原　秀樹（附属札幌小）
永井　文明（清 田 中）
栗原聡太郎（宮の森小）
内藤　広大（幌 南 小）
町村　康武（宮の森小）
田口　祐弥（附属札幌中）
横井　知佳（西岡北中）
成田　　芳（附属札幌中）

社連魂を全国へ発信

札幌市社会科教育連盟　事務局長　山本　秀夫
（札幌市立真栄小学校長）

第 49 回札幌地区社会科教育研究大会 第 77 回 北海道社会科教育研究大会 第 60 回 全国小学校社会科研究協議会研究大会を令和４年 10 月 27 日に開催した。新型コロナウイルスの感染拡大を踏まえ、ハイブリッド式の研究大会であった。

公開授業の撮影は、９月 15 日を皮切りに 10 月４日に至るまでの短期間で、９校において 17 本を録画した。参会者は事前に撮影した授業を視聴した上で、全体会、シンポジウムに参加するとともに、９つの分科会に分かれ、活発な研究討議を行った。

大会準備委員会を３回、大会実行委員会を６回開催し準備を進めてきた。研究の最先端である学年部会とそれを支える運営側が一体となって進めてきた研究大会である。その過程で、会員一人一人が自分の立場から何ができるかを考え業務を探しながら取り組み、大会を成功に導いた。改めて、社連（社会科教育連盟）の組織力・底力を感じた。

授業づくりにおいては、共生の文化を創造する資質や能力を育むために、過去３年間の取組を生かしつつ、主張や実践の精度を高めるとともに、新たな視点からの教材化にも挑戦した。現状に満足するのではなく更なる授業の可能性を探り続けてきたのである。「未来を創造し、北国に生きる子」を目指した研究、発想の転換を生かす人物の営みに焦点化した教材化、未来社会を見つめ未来に生きる子どもたちに必要な資質や能力への着眼というこれまで社連で大切にしてきた研究を受け継ぐとともに、共生・持続可能という社会的な価値に迫るため、教材化の視点を具体化し授業づくりに取り組んできた。多文化共生、共存・共栄、関係を築く共助、多様性の調和、異質をつなぐ地域創生、未来を見据えた国づくりなど、教材化の視点を明確にもつことの大切さを全国に問うことができた。

また、主張は子どもの姿でという合言葉のもと、「教材化から導き出された『～なのに、○○なんて』という子どもが追究したくなる問い」、「協働的な学びを生かした社会的な意味の追究」、「これまでの追究を吟味・検証・再考」という授業の過程を重視した。それが、これからの社会を考えていくための新たな視点を獲得していく子どもの姿につながった。

冷戦後のグローバリズムは、思想の違いを超えて国際社会のつながりを強め、多くの恩恵をもたらした。しかし、ロシアのウクライナ侵攻は、民主主義国家と権威主義国家の溝を深め、経済・政治の両面で国際社会の分断を進めた。かけがえのない多くの命が奪われるとともに、グローバルに築いてきた相互依存の関係は、エネルギー資源や食料などの輸出入制限という形で、互いを攻撃し合う武器として使われている。今後ますます国際社会の分断が懸念されるからこそ、これまで社連が重視してきた「共生文化の創造」への着眼は、大切にしていかなければならない。それをしっかりと心に留めつつ、本大会の総括としたい。

最後に、授業校である八軒西小学校、宮の森小学校、緑丘小学校、ノホロの丘小学校、桑園小学校、山鼻小学校、伏見小学校、資生館小学校、北海道教育大学附属札幌小学校の皆様をはじめ、関係者各位の多大なる御理解と御協力に心より感謝申し上げ、結びの言葉とする。

発　行　令和５年(2023 年)２月

発行者　北海道社会科教育連盟（http://www.school-ed.jp/do-sharen/）
委員長　白　崎　正

札幌市立八軒西小学校
〒063-0843　札幌市西区八軒３条西５丁目 1-1
TEL（011）643-4352　FAX（011）643-0849

事務局　札幌市立円山小学校内
事務局長　平　澤　淳　志
〒064-0821　札幌市中央区北１条西 25 丁目 1-8
TEL (011)631-3437　FAX (011)615-6593

大会成果号に関するご意見・ご要望は下記へお願いいたします。

札幌市立ノホロの丘小学校
編集部長　岩　渕　啓　佑
〒004-0032　札幌市厚別区上野幌２条４丁目 5-1
TEL (011)893-5055　FAX (011)893-3537